

# CNEAS

Center for Northeast Asian Studies

Tohoku University



東北大学

## 東北大学 東北アジア研究センター

〒980-8576  
宮城県仙台市青葉区川内41番地  
TEL(022)795-6009  
FAX(022)795-6010  
<http://www.cneas.tohoku.ac.jp>

2013年9月30日発行



東北大学

東北アジア  
研究センター

東北大学  
東北アジア研究センター  
要覧 2013-2014

Survey and Guide 2013-2014  
Center for Northeast Asian Studies  
Tohoku University





## ごあいさつ



東北アジア研究センターが創設されて17年になります。1981年10月、大学生だった私は、2年間の留学のためにモンゴル人民共和国（当時）の首都ウランバートルに降り立ちました。そこで見たものは、ソ連圏社会主義体制という別世界でした。モンゴルの人々は、社会主義の未来に対する強い自信に満ちあふれていました。1989年6月、私は北京の中央民族学院（現・大学）に滞在し、天安門事件を目の当たりにしました。あの大事件が、ソ連のゴルバチョフの中国訪問と重なったことは、その後の歴史を象徴する出来事だったように思えます。天安門の悲劇は、東北アジアが生まれる陣痛だったのかもしれませんが。その後も痛みは続きました。1993年夏にモンゴルを訪れた私は、そこに社会主義の廃墟を見出しました。経済の崩壊と極端な物資の不足、体制崩壊により人々が受けた心の傷など、同じことがロシアでも起こっていました。その後復興したモンゴルは日本との関係を急速に深め、世界でもっとも親日的な国の一つです。日本とロシアの関係も次第に深まりつつあることは、東北大学がロシア科学アカデミーや主要大学と学術交流協定を締結し、交流が進んでいることから伺われます。20年前に私が留学したモンゴルは、とても遠い国でした。今我々は、毎年モンゴルや中国をわざわざ訪れ、現地の研究者仲間と学問を語ることができます。ここ5年間、私は東北アジア研究センターが実施した「日本アジア講座」でロシアのノボシビルスク大学を訪れてきました。北京から4時間半で到着できてしまうことに、自分の中の古い距離感との乖離を感じざるをえませんでした。私は、ますます色濃く浮かび上がる東北アジアを旅しているのです。

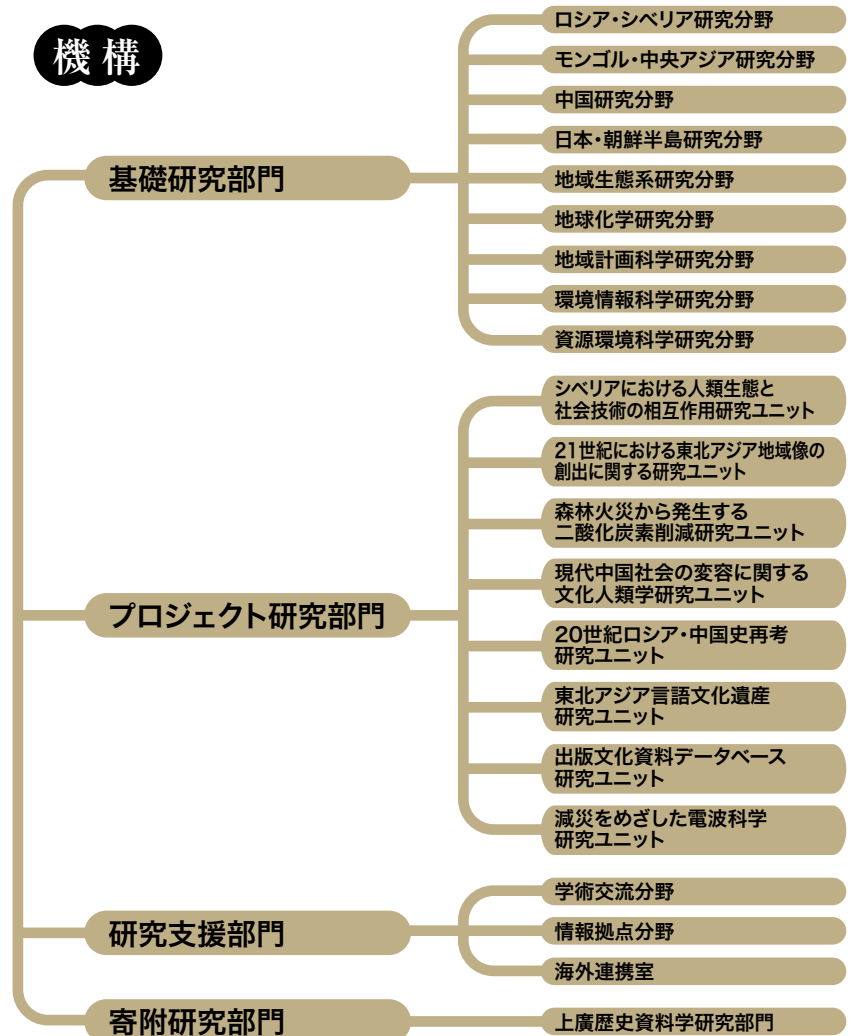
ますます近くなる東北アジア、しかしそれは、東北アジアがもつ文化的多様性を消去してしまうものではありません。シベリアの瀟洒なヨーロッパ風の町並み、モンゴルの広大な草原で営まれる遊牧生活、活気に満ちた中国の大都会、大地に溶け込むかのように生きる中国の農民達。東北アジアの文化は、いまだに多様です。多様な文化が会うところ、摩擦も生じます。しかしそのような多様性は、地域本来の属性だとも言えます。均質性ではなく、多様性に立脚した地域としての東北アジアの出現。それが我々が今直面しているできごとなのです。そしてそこから生じる課題を、地域の研究者や住民と共に考える環境を我々は手にしている。それはとても大事なことのように思われます。

## contents

ごあいさつ	2
目的・理念・機構	3
沿革	4
教職員紹介	6
東北アジア研究の最前線	8
共同研究	10
個人研究	12
出版物	26
国際学術交流	28
社会連携	29
データ	30



## 機構



## 理念・目的

本センターは、東北アジアという地域理解の枠組みを確立し、普及させることを第一の目的としています。東北アジア研究センターが設立された1996年以後の17年間は、まさに東北アジアが地域枠組みとして実質化していった時代だったと言えます。中国の経済発展と日本・韓国などの結びつき、ロシア、モンゴルのアジア太平洋国家としての再定義と東アジアとの関係構築、そして中国とロシアを中心とする関係調整機構の出現など、今やロシアのシベリア・極東、中国、朝鮮半島、モンゴル及び日本から成る東北アジアは、冷戦時代とは比較にならないほど密接な関係をもっています。北アジア、東アジアといった既存の地域概念では、現今の状況を捉えることができなくなっているのです。しかしわが国では、未だに日中・日露・日韓などといった二国間関係の枠組みでの理解を克服できず、日本が東北アジアの一部としてあることも十分に認識されているとは言えないのが実情です。東北アジア地域概念の確立は、わが国にとって急務であると言えます。

本センターは、東北アジアの地域社会と課題を共有しながら研究を進めていきます。2011年3月の東日本大震災は、地域からの要請が、最も鋭い形で学術研究に突きつけられた事例だったと言えるでしょう。しかし大規模な災害ほどではなくても、地域社会の学術研究への要請は、すでにさまざまな形で提示されています。そのような地域の要請は、地域社会との恒常的な絆の中ではじめて感知することができます。地域研究のニーズを、学術的動機だけではなく、地域社会の中に求めることが重要です。もはや「先進国」による一方的な異文化研究の時代ではないのです。

地域研究に求められるのは、実践性です。経済発展の中で、東北アジアは今急激な変化を経験しています。変化への戸惑いは、ときに深刻な亀裂を社会に走らせませす。開発に伴う環境問題、民族の対立、グローバル化とそれへの反発、領土問題などなど、亀裂の露頭はじつに様々な形で現れます。そのような課題を、東北アジアの枠組みにおいて共有することが重要です。一方で東北アジア諸国・地方は、関係緊密化の中で、すでに多くのものを共有しています。地域の文化的な価値をどのように評価し、何を残し、何を变えなければならないのか。正負の遺産にどのように向き合うのか。それが東北アジア地域研究に求められている課題です。

だから東北アジア研究センターは、地域の文化を、地域社会が遺すべ

き価値、すなわち文化遺産(cultural heritage)として、地域の研究者、住民と共に考えていくことをめざします。地域を研究するという事は、学術研究が地域の文化を操作・管理するのではなく、地域住民が継承し、あるいは創出しようとする文化のあり方を、住民とともに考えていくことです。そのためには、文化的多様性に対する鋭敏な感性が不可欠です。グローバル化時代の今日、文化の多様性をどのように確保していくのかが、問われているのです。東北アジア研究センターのスタッフは、英語のみならず、中国語・ロシア語・韓国語・モンゴル語など、地域の多様な文化を支える言語を駆使して、地域とともに学術研究を実践していきます。

地域研究への要請は、けっして地域住民の社会・文化の領域にとどまりません。地域の山河も、そこに住む人々が生を営む、人間的な意味づけを与えられた「環境」としてあります。ですから「自然環境」の研究も、地域研究の対象にほかなりません。地域研究において学際性が要求されるのは、学問が細分化されているからではなく、地域「環境」の多様性とそれに与えられた意味の包括性に起因するのです。

だから東北アジア研究センターは、文系・理系のさまざまな研究分野の連携によって、地域を見つめる多様な視座を確保することをめざします。我々は、高度に専門化し、分厚い蓄積をもつ諸学の成果を有しています。地域研究の学際性とは、専門研究の到達点を安易に否定することではなく、その蓄積を地域理解のために動員し、活用することです。文系・理系の研究者の連携を確保し、諸学がそれぞれの分野で東北アジアを考えることで、地域のより多様な課題を視野に収めることが可能となります。

また地域研究者にとって、地域の研究者達の研究成果と向き合いことなくして、研究は成り立ちません。我々が彼等を研究するように、彼等も我々を研究しています。我々には、東北アジアの研究者コミュニティーの一員として、そのような双方向性をもった東北アジア地域研究を進めていくことが求められています。

このような東北アジア研究センターのポリシーは、「門戸開放」「実学尊重」、そして「研究第一主義」を校是とする東北大学の精神を体現するものと考えています。地域研究は、まさにそのような学知としてあります。

我々は、このような考えに立って、東北アジアという地域の理解を紡ぎ出したいと考えています。





## 沿革

20世紀末の急激な冷戦構造の解体、経済・情報のグローバル化を背景として、シベリアや中国・朝鮮半島など日本に隣接する地域との相互理解と協力、共生することの重要性が広く一般に認識されるようになった。東北大学はシベリアの資源・科学技術等の重要性に着目し、1991年以来全6回のシベリア訪問団を組織し、1992年にはロシア（当時、ソ連）科学アカデミー・シベリア支部との間で大学間学術交流協定を締結した。

1996年5月東北大学は、冷戦構造の崩壊以降の日本が隣接する広域世界のダイナミズムを理解することの重要性に鑑み、大学附属の学内教育研究共同施設として東北アジア研究センターを発足させた。北アジア・東アジア・日本を包摂する東北アジアという新たな地域概念を提示し、その歴史-文化・民族-国家・生態-環境に関わる諸問題を人文社会科学と自然科学との連携によって融合的、総合的研究を推進するのが設置目的であった。

東北アジア研究センターは、東北大学初の文系を主とする研究所型組織（部局）である。その組織構成は、1962年以來の文学部附属日本文化研究施設を母体として、文学部・理学部・工学部・言語文化部の協力の下に整備された。発足当初、所属する教員は東北大学内の3つのキャンパスに分散していたが、1999年以降、全研究施設が川内キャンパス内におかれている。発足時の組織機構は、3基幹研究部門（地域交流、地域形成、地域環境）、2客員研究部門（文化・社会経済政策、資源・環境評価）、教官26名・客員5名（うち2人が外国人）で構成された。その特徴は、部門内に文理双方の分野を含む研究体制にあった。2004年4月の国立大学の法人化を経て、2007年4月には研究体制の抜本的な改革を行い、基礎研究部門（教員が所属する9研究分野）、プロジェクト研究部門（現在、8研究ユニット）、研究支援部門（2分野、1室）という体制となった。更に2009年4月にコラボレーション・オフィスを開設し、研究企画、情報発信機能の充実と共に人文社会系他部局との連携を推進する体制を整えた。これにより、個人ベースの基礎的研究を着実にすすめて、多くの研究者による総合的課題や、実践的・応用的な研究課題にも即時的かつ柔軟に対応できる体制とした。

本センターは、東北アジアを対象とする地域研究機関として、外国人研究員（客員教授）制度や学術交流協定などを通して関係各国・地域の研究者との交流を広く進めている。1998年5月には東北大学初の海外事務所として、シベリア最大の都市ノボシビルスクに隣接する研究学園都市アカデムゴロドクにシベリア連絡事務所を開設した。その後、共同ラボラトリーと名称を変更し、ロシア科学アカデミー・シベリア支部との共同研究推進を目指すと共に、東北大学が同所に設置した東北大学ロシア代表事務所・シベリア支部との連携をとりながら、我が国の大学とロシアとの交流にも協力体制を築いてきた。

流動組織としてのプロジェクト研究部門に加え「共同研究」制度を設け、複数の教員からなる目的を絞り込んだ研究組織の立上げを奨励するとともに、時代に即した学問領域を広げるため、学内にとどまらず国内外の関係する研究者とのネットワーク構築を支援する各種制度を発足させている。研究活動の成果は、1997年に創刊された査読雑誌「東北アジア研究」をはじめとしてその他の学術雑誌・学術書籍で発表されている。それ以外に、「東北アジア研究センター叢書」「東北アジア研究センター・報告」「東北アジア研究専書」などの本セン

ター独自の出版物も用意し、研究成果の情報発信を促している。更に東北大学出版会と協力しながら「東北アジア読本」としてセンターでの研究活動をシリーズとして出版することで、一般市民の方により見ていただきやすい仕組みを作ることとした。

大型資金プロジェクトとしては、文部科学省科学研究費補助金・特定領域研究として「東アジア出版文化の研究」（2000～2005年度）及び「火山爆発にともなう地表面象に対する新研究手法の開発と適用」（2002～2006年度）、同特別推進研究「清朝宮廷演劇文化の研究」（2008～2012年度）、さらに科学技術振興機構・戦略的創造研究推進事業「地雷探知用ウエアラブル・SAR-GPRの開発」（2002～2006年度）などを実施してきた。

これらの研究成果は、学術面のみならず社会貢献にも関わっている。電磁波研究を基礎としたモンゴルのウランバートルの地下水計測や紛争地域に必要な人道的地雷探査技術の開発、国内外の火山噴火に対する観測・研究などは国際貢献の例である。また出版文化研究を通じての東アジアでの資料保存事業を実施してきた。

一方、地域の人間と社会を災害から守るための実践的防災学推進をめざして、本センターを中核に、東北大学の広い研究分野の研究者が目的を一つとする「防災科学研究拠点グループ」を結成した。従来型の理系的な防災技術に留まらず、住民に対する防災意識の啓蒙や災害時の資料保全への対応など文系的なアプローチを含めた幅広い地域活動を展開したことが特色である。2011年3月の東日本大震災では、本グループが東北大学の叡智を結集し地域の復旧・復興への具体的な活動を行うだけでなく、これまで蓄積してきた災害科学を東北大学の重要な研究の柱の一つとするための最大限の努力を続け、災害科学国際研究所の設置に結びついた。歴史資料保全の活動は、2012年度から設置された上廣歴史資料学研究部門（寄附研究部門）へと引き継がれている。

さらに2004年に発足した地域研究を推進する大学・研究機関・NGO等の全国組織体「地域研究コンソーシアム」設立に関わるとともに、2005年には「北東アジア研究交流ネットワーク」（当該地域に関わる研究機関・各種シンクタンクなどの交流組織）の設立にも貢献した。これらを通して他大学・研究教育機関、さらに民間組織などとの連携を進めている。

#### 歴代センター長

初代	吉田 忠	1996. 5.11	1999. 7.31
第二代	徳田 昌則	1999. 8. 1	2001. 3.31
第三代	山田 勝芳	2001. 4. 1	2005. 3.31
第四代	平川 新	2005. 4. 1	2007. 3.31
第五代	瀬川 昌久	2007. 4. 1	2009. 3.31
第六代	佐藤 源之	2009. 4. 1	2013. 3.31
第七代	岡 洋樹	2013. 4. 1	現在に至る



# 教職員紹介 (2013年度)

センター長 おか ひろ き  
**岡 洋樹**

## 教 員

### ロシア・シベリア 研究分野

教授

てらやま きょうすけ  
**寺山 恭輔**

ロシア・ソ連史 日露・日ソ関係史

教授

たかくら ひろ き  
**高倉 浩樹**

社会人類学 シベリア民族誌

助教

しおたに まさちか  
**塩谷 昌史**

ロシア経済史  
ロシアとアジアの経済関係

兼務教員 (教授) (文学研究科)

あ こしま かおる  
**阿子島 香**

考古学 先史学

### モンゴル・中央アジア 研究分野

教授

くりばやし ひとし  
**栗林 均**

言語学 音声学 モンゴル語学

教授

おか ひろ き  
**岡 洋樹**

東洋史 モンゴル史

准教授

やなぎだ けんじ  
**柳田 賢二**

言語学 ロシア語学  
言語接触の研究

### 中国 研究分野

教授

いそべ あきら  
**磯部 彰**

中国文学 東アジア文化史

教授

せがわ まさひさ  
**瀬川 昌久**

文化人類学 華南地域研究

教授

あすか じゅせん  
**明日香 壽川**

環境政策論

准教授

うえの としひろ  
**上野 稔弘**

中国現代史 中国民族学

兼務教員 (准教授) (教育学研究科)

い いんじゃ  
**李 仁子**

文化人類学 在日移民研究

### 日本・朝鮮半島 研究分野

准教授

いし い あつし  
**石井 敦**

国際関係論 科学技術社会学

### 地域生態系 研究分野

教授

ちば さとし  
**千葉 聡**

生態学 保全生物学 進化生物学

准教授

しかの しゅういち  
**鹿野 秀一**

微生物生態学 システム生態学

### 地球化学 研究分野

教授

いしわり あきら  
**石渡 明**

地質学 岩石学

准教授

ひらの なおと  
**平野 直人**

海洋底科学 テクトニクス  
地質年代学 岩石火山学

助教

ごとう あきお  
**後藤 章夫**

火山物理学 マグマ物性

助教

みやもと つよし  
**宮本 毅**

火山岩岩石学 火山地質学

兼務教員 (教授) (理学研究科)

おおたに えいじ  
**大谷 栄治**

実験岩石学 高圧地球物理学

### 地域計画科学 研究分野

兼務教員 (教授) (災害科学国際研究所)

おくむら まこと  
**奥村 誠**

土木計画学 交通計画

### 環境情報科学 研究分野

教授

くどう じゅんいち  
**工藤 純一**

デジタル画像理解学

非常勤講師 (山形大学)

やなぎさわ ふみたか  
**柳澤 文孝**

地球環境学

非常勤講師 (東北工業大学)

かわの こういち  
**河野 公一**

衛星画像処理 リモートセンシング

非常勤講師 (株ミツバ)

いとう まさなお  
**伊藤 正直**

ロシア政策論

### 資源環境科学 研究分野

教授

さとう もとゆき  
**佐藤 源之**

電磁波応用工学 地下電磁計測

助教

たかはし かずのり  
**高橋 一徳**

電磁波計測 応用地球物理学

助手

こまぎの ともひろ  
**駒木野 智寛**

GPRによる遺跡探査 災害考古学  
地理情報システム (GIS)

非常勤講師 (仙台高等専門学校)

そのだ じゅん  
**園田 潤**

計算電磁気学

### シベリアにおける 人類生態と社会技術の 相互作用 研究ユニット

兼務教員 (准教授) (文学研究科)

やまだ ひとし  
**山田 仁史**

神話学 民族学

### 現代中国社会の変容に 関する文化人類学 研究ユニット

兼務教員 (准教授) (文学研究科)

かわぐち ゆきひろ  
**川口 幸大**

### 研究支援部門 学術交流分野

助教

きむ ひよんじょん  
**金 賢貞**

民俗学 日韓比較社会・文化論

### 寄附研究部門 上廣歴史資料学研究部門

准教授

あらたけ けんいちろう  
**荒武 賢一朗**

日本近世史 経済史 都市史

助教

たかはし よういち  
**高橋 陽一**

日本近世史 旅行史

助教

ともだ まさひろ  
**友田 昌宏**

日本近代政治史

兼務教員 (教授) (災害科学国際研究所)

ひらかわ あらた  
**平川 新**

日本近世政治経済史

## 教育研究支援者

いなざわ つとむ  
稲澤 努  
文化人類学

たつみ ゆきこ  
巽 由樹子  
ロシア史 文化史

たぎざわ かつひこ  
滝澤 克彦  
宗教学

Tsogbadrakh Gantsetseg  
ツォグバドラフ ガンツェツェグ  
言語学 モンゴル語学

あさだ まさふみ  
麻田 雅文  
ロシア史 中露国際関係

## 産学官連携研究員

Koyama Christian Naohide  
コヤマ クリスチャン ナオヒデ  
リーダー・リモートセンシングの応用

りゅう はい  
劉 海  
電磁波を用いた非破壊センシング  
技術の研究開発

る こうしゆん  
盧 向春  
環境経済学

## 研究支援者

きむら かずたか  
木村 一貴  
地域生態系 (進化生態学専攻)

## 専門研究員

ちよう せい  
張 政  
文化人類学 博物館学

あお き まさひろ  
青木 雅浩  
モンゴル近現代史  
東北アジア国際関係史

Turmunh Odontuya  
トゥルムンフ オドントヤ  
文化人類学 モンゴル研究

さとう のりゆき  
佐藤 憲行  
東洋史 清代モンゴル史

い そん ひ  
李 善姬  
文化人類学 ジェンダー研究

ささ き さとし  
佐々木 聡  
宗教文化史 術数文献の書誌研究

## 日本学術振興会 特別研究員

もり い ゆうた  
森井 悠太  
進化生態学

かねもと けいいちろう  
金本 圭一朗  
国際制度間の相互関連  
地域間産業連関分析

かめだ ゆういち  
亀田 勇一  
進化生物学

わだ しんいちろう  
和田 慎一郎  
進化生態学

すず き のりゆき  
鈴木 紀之  
進化生態学

あさやま しんいちろう  
朝山 慎一郎  
環境政策論 科学技術社会学

こばやし ひろし  
小林 宏至  
社会人類学

## 外国人研究員

客員教授  
Laikhansuren Altanzaya  
ライハンスレン アルタンザヤ  
(モンゴル国立教育大学教授)  
2013. 4. 1 - 2013. 7. 31

客員教授  
ば や る  
巴 雅 爾  
(内蒙古師範大学教授)  
2013. 9. 2 - 2013. 12. 31

客員教授  
はん けんこく  
潘 建国  
(北京大学教授)  
2013. 9. 1 - 2013. 11. 30

客員教授  
Leo Lighthart  
レオ リヒタート  
(デルフト工科大学名誉教授)  
2014. 2. 1 - 2014. 3. 31

客員教授  
Larisa Prozorova  
ラリサ プロゾロバ  
(ロシア科学アカデミー極東支部  
生物学土壌学研究所上席研究員)  
2014. 4. 1 - 2014. 6. 30

客員教授  
ぼ ど ま おお っ さ る  
巴達瑪敖德斯爾  
(内蒙古大学教授)  
2014. 10. 1 - 2015. 1. 31

客員教授  
Sampildondov Chuluun  
サムビルドンドヴ チョローン  
(モンゴル科学アカデミー歴史研究  
所所長)  
2014 予定

客員教授  
Klinich Natalia Gennadiyevna  
クリニチ ナタリア  
ゲンナディエヴナ  
(太平洋国立大学准教授)  
2014 予定

客員教授  
Chernolutskaia Elena Nikolaevna  
チェルノルツカヤ エレーナ  
ニコラエヴナ  
(ロシア科学アカデミー極東支部  
歴史・考古学・極東諸民族人類学  
研究所主任上級研究員・准教授)  
2014 予定

## 技術補佐員

とくだ ゆかこ  
徳田 由佳子  
なかい なおこ  
中井 直子  
ほかり みどり  
穂苺 みどり

## 職員

事務長 志田 昌幸

専門員 日野 謙二

事務室 高橋 篤志

もりた ふみや  
森田 史哉

まえかわ じゆんこ  
前川 順子

おいかわ ふみ  
及川 二美

あべ ゆいこ  
阿部 由比子

よこやま なおこ  
横山 尚子

おがわ ちほ  
小川 千穂

くまがい かおり  
熊谷 香

ささ き りつこ  
佐々木 理都子

うみぐち おりえ  
海口 織江





## 東北アジア研究の最前線

work 01

20世紀ロシア・中国史再考研究ユニット  
代表：寺山恭輔

### 新疆地域の情勢分析を通じた20世紀中国・ロシア関係史の研究



ロシア連邦国家公文書館



台湾國史館分館

20世紀初頭の中国新疆地域ではムスリム諸民族の叛乱や軍閥盤踞の状況の下、ロシアの影響が顕著であった。その傾向は中ロ双方の革命による体制変革後も続き、中国は20世紀中頃までソ連の新疆における軍事的・経済的影響力に悩まされた。だが今日では共産党政権の下で新疆に対する

統治を強化した中国が、旧ソ連を構成した「ロシアの裏庭」たる中央アジア諸国に経済的影響力を拡大し、ロシアとの間で軋轢を生むという構図の逆転が起きている。本プロジェクトは中ロ双方から史料収集・分析を進め、この二大国のパワーが交差する新疆情勢の歴史的理解を目指す。



スタンフォード大学フーヴァー研究所



傲仇英「清明景物図巻」  
明時代に郊外で行なわれた演劇風景

### 千年の世に亘る印刷文化遺産を公開する

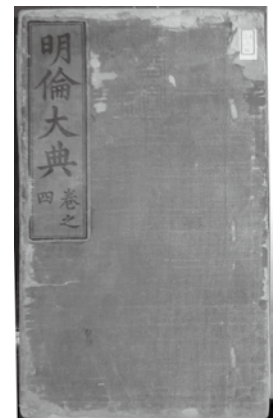
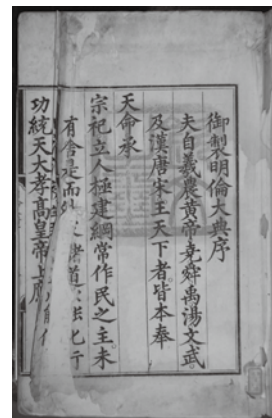
東北アジアの南、宋王朝で約千年前に確立された木版印刷技術は、文化交流の動きに応じて東は朝鮮半島や日本、南はベトナム、西は中央アジアやチベット、北はモンゴル方面までに拡大し、それぞれの民族文化を伝える重要な役割を果たした。東アジア

や東北アジアの出版文化をめぐる国際的研究では、古い写本を含むアジアの書籍や歴史的な文書、絵画を研究資料として蒐集した。その研究理念の一つに、蒐集した資料群を広く社会で共有することを含めた。この

ユニット研究は、宋刊本や元刊本といった文化財、明清の絵画、或は、ベトナムの木版本、日本中世の出版物などを画像化し、データベースを作成して自由に利用できるようにすることを目的としている。

work 02

出版文化資料データベース研究ユニット  
代表：磯部 彰



「明倫大典」  
明朝の嘉靖帝が自己の正統性を示すため出した宮廷出版物

減災をめざした電波科学研究ユニット  
代表：佐藤源之

## レーダー技術を利用した 震災復興の推進

東日本大震災以降、私達は地中レーダー（GPR）技術を利用して減災、復興活動を行ってきた。津波被害を受けた住宅の高台移転に伴い、今後多数の遺跡調査が行われる。GPRは非開削の探査技術であり、遺跡の有無を迅速に判断することができる。また発掘に先立ち、GPRによって遺跡状況を把握することで、効率のよい調査が実現できる。我々は東北大学が開発した新しい地中レーダー計測手法（アレイ型GPRと高精度3次元GPR技術）を利用した遺跡調査技術を、地方自治体の遺跡探査へ実践的な技術協力・技術指導することで震災復興を



山元町高台移転予定地(合戦原古墳)での遺跡調査

推進する活動を2012年度から開始した。宮城県文化財保護課ならびに宮城県内市町村と協力し、本事業を進めている。既に山

元町、東松島市での活動を開始したほか、名取市では津波被災者捜索にも協力している。



野蒜築港での遺跡調査



古文書講座の様子

## 歴史資料の保全・調査・研究 —新しい史実の発見—

2012年4月から上廣倫理財団の支援によって、センター内に開設されたのが本研究部門である。私たちは、歴史資料の保全・調査・研究を大きな目標に掲げ、さまざまな取り組みを試みている。この歴史資料とは、主に

江戸時代の古文書（こもんじょ）から、明治時代以降の近代文書を含む。この作業をこなすためには、いわゆる「くずし字」を解読しなければならない。私たちのプロジェクトでは、学生・大学院生、一般の社会人、海外の

日本学研究者たちを対象にした「古文書解読講座」を実施し、多くの人々が歴史資料に触れ、そして新しい史実の発見があることを願っている。



「日本海陸路程図」にみる江戸時代の東北地方

上廣歴史資料学研究部門  
平川 新(兼務)、荒武賢一朗、高橋陽一





## 共同研究

### [ プロジェクト研究ユニット ]

- ・シベリアにおける人類生態と社会技術の相互作用研究ユニット 代表：高倉 浩樹 教授  
本研究の目的は、食糧生産・居住・水道設備・輸送システムなどに関わる伝統的な文化およびこの地域に特有な形で近代化された技術システムに着目しながら、マイクロ環境と人間の社会的文化的適応との相互作用を理解することである。歴史的背景およびシベリア以外の極北圏／北方圏との地域比較をもふまえながら、人類生態と社会的技術の関係の今日的プロセスを明らかにする。
- ・21世紀における東北アジア地域像の創出に関する研究ユニット 代表：岡 洋樹 教授  
本プロジェクトは、東北アジア研究センター及び内外の研究者・機関が展開する個別課題に関わる共同研究やプロジェクトの成果を統合し、「東北アジアとは何か」という問いに対する回答を準備することにより、当該地域像を研究者コミュニティや社会に向けて発信することをミッションとする。具体的には、統合的地域像を創出するために一連の研究集会やシンポジウムを企画・運営する。また東北アジア研究者データベースの構築を目指す。
- ・森林火災から発生する二酸化炭素削減研究ユニット 代表：工藤 純一 教授  
主にロシアを対象とした森林火災から発生する二酸化炭素の削減、ならびに、関連する課題を技術分野、環境分野、経済分野、政策分野等の専門家の参加により文理融合の方法論を展開しながら基礎研究を行う。これにより、大規模森林火災の抑制と発生する二酸化炭素量削減の持続効果が期待される。
- ・現代中国社会の変容に関する文化人類学研究ユニット 代表：瀬川 昌久 教授  
文化人類学的中国研究において、近年の経済発展、グローバル化、文化の資源化などの諸変化を背景に、親族・家族、民族・地方文化、信仰・習俗等の古典的研究対象がどのような変化を経験しつつあるのか、またそれに連動して研究者の問題意識や研究手法がどのように変遷しつつあるのかを検証し、新たな展望を開くことを目的としている。
- ・20世紀ロシア・中国史再考研究ユニット 代表：寺山 恭輔 教授  
ときには対立しながらも密接に交流し、20世紀の世界の政治、経済、社会に大きな影響を及ぼした中国とロシア（ソ連）の歴史に関する未解明の課題について、個別研究の限界を打破すべく、それぞれの国を専門に扱う研究者が共同で史料公開や研究の進展状況を明らかにして新たな歴史像を生み出すことをめざしている。
- ・東北アジア言語文化遺産研究ユニット 代表：栗林 均 教授  
モンゴル高原や興安嶺を発祥の地として、13世紀から20世紀にかけて建設されたモンゴル帝国と大清帝国で使用されたモンゴル語と満洲語で記録された文字資料を研究します。本研究ユニットでは、モンゴル国、中国、ロシアをはじめ、国内・国外の研究者・研究機関との協力体制を構築して、モンゴル族と満洲族の言語文化遺産を系統的に調査・研究するネットワークを形成します。
- ・出版文化資料データベース研究ユニット 代表：磯部 彰 教授  
本研究ユニットは、特定領域研究、特別推進研究等を進める中で蒐集した東アジアの典籍の文化財としての性格を明らかにし、それに基づいたデータベースを作成して公表する。取り上げる資料は、宋版大蔵経、元刊詩集伝、明刊本三国志伝、説唱本小説、乾隆帝得勝図、避暑山莊図などである。
- ・減災をめざした電波科学研究ユニット 代表：佐藤 源之 教授  
東日本大震災に伴う住宅の高台移転に際し、緊急を要する多数の遺跡調査に対し、本プロジェクト研究ユニットではアレイ型地中レーダーなどの先端的な地下計測手法を利用した遺跡調査技術の開発を進めるのと同時に、地方自治体の遺跡探査への実践的な技術協力、技術指導による文化財保護活動を実践する。

### [ 共同研究 ]

- ・氷融洪水とその社会対応から見る極北圏地域社会の比較研究（シベリアにおける人類生態と社会技術の相互作用研究ユニット）
- ・東北アジアにおける辺境地域社会再編と共生様態に関する歴史的・現代的な研究  
（21世紀における東北アジア地域像の創出に関する研究ユニット）
- ・近世・近代における内陸アジア遊牧民社会の構造的特質とその変容に関する研究 代表：岡 洋樹 教授
- ・典籍文化遺産の研究（出版文化資料データベース研究ユニット）
- ・東日本大震災後の復興過程に関わる地域社会比較と民族誌情報の応用 代表：高倉 浩樹 教授
- ・江戸時代から現代に通じる東北の歴史 代表：荒武 賢一朗 准教授
- ・日本列島の文化交渉史—経済と外交 代表：荒武 賢一朗 准教授
- ・現代中国社会の変容とその研究視座の変遷—「宗族」を通じた検証（現代中国社会の変容に関する文化人類学研究ユニット）
- ・震災復興のための地中レーダによる遺跡探査推進（減災をめざした電波科学研究ユニット）
- ・新疆、満州をめぐる20世紀前半のソ連、中国の政策（20世紀ロシア・中国史再考研究ユニット）

### [ 公募型共同研究 ] 25年度採択課題

- ・社会的行為としての〈食〉をめぐる文化人類学的研究（B）フィールド適用型 代表：櫻田 涼子（育英短期大学・専任講師）
- ・モンゴルにおけるキリスト教宣教と聖書翻訳の過去と現在（C）学術深化型 代表：芝山 豊（清泉女学院大学人間学部・教授）
- ・福島原発事故による環境汚染に対する集落単位の除染活動と台湾離島の核廃棄物貯蔵場の完全管理（A）地域課題解決型研究 代表：中生 勝美（桜美林大学・教授）
- ・近世化社会との対話：東北アジア地域における「成熟社会」モデル構築のための萌芽的研究（C）学術深化型 代表：飯島 渉（青山学院大学文学部・教授）



## 2013年度競争的資金による研究プロジェクト

	研究種目	研究課題名	代表者
研究費	基盤研究(A)	最適空間サンプリングによる地雷検知用レーダイメージングの効率化	佐藤 源之 教授
	基盤研究(A)	東北アジアにおける辺境地域社会再編と共生様態に関する歴史的・現在の研究	岡 洋樹 教授
	基盤研究(B)	1920-40年代の中国・ソ連における民族政策の比較研究	上野 稔弘 准教授
	基盤研究(B)	ミクロ環境史の復元手法による北極圏における温暖化の先住民社会への影響分析	高倉 浩樹 教授
	基盤研究(B)	中世モンゴル語研究の統合	栗林 均 教授
	基盤研究(B)	東日本大震災からの復興を支援する科学コミュニケーター養成プログラムの開発と実践	谷口 宏充 名誉教授
	基盤研究(B)	過去で未来を守る：保全古生物学の確立に向けて	千葉 聡 教授
	基盤研究(C)	「工藤忠関係資料」による東北アジア近代史研究	山田 勝芳 名誉教授
	基盤研究(C)	ユーラシアにおける流通ネットワークの再編—ロシア製綿織物輸出の観点より—	塩谷 昌史 助教
	基盤研究(C)	日本の古生代オフィオライトの多様性と沈み込み帯プロセス	石渡 明 教授
	基盤研究(C)	現代中国社会の変容とその研究視座の変遷—宗族を通じた検証	瀬川 昌久 教授
	基盤研究(C)	震災後の東北における地域再編と結婚移民女性の社会参画に関する文化人類学的考察	李 善姫
	基盤研究(C)	土壌特性の解析による地雷検知センサ性能評価とその応用	高橋 一徳 助教
	基盤研究(C)	経済モデル分析を中心とした炭素制約が国際競争力に与える影響の学際的分析	明日香壽川 教授
	基盤研究(C)	炭素隔離技術のデモンストレーションプロジェクト：マスメディアと意思決定要因分析	石井 敦 准教授
	基盤研究(C)	明清教派系宝巻盛衰の研究—武神と聖母神信仰をめぐる—	磯部 彰 教授
	基盤研究(C)	現在の中央アジアにおけるリングアフランカとしてのロシア語の特徴と変容の研究	柳田 賢二 准教授
	基盤研究(C)	浅い湖沼におけるハス群落拡大がメタン食物網へあたえる影響	鹿野 秀一 准教授
	挑戦的萌芽研究	ロシア新聞データベースの構築と日露報道の比較研究	徳田由佳子
	挑戦的萌芽研究	巨大地震後の太平洋プレート応力場変化の実体と火山活動	平野 直人 准教授
	挑戦的萌芽研究	東日本大震災後の民俗文化にかかわる災害民族誌研究の国際的ネットワーク構築	高倉 浩樹 教授
	若手研究(B)	日本近世近代における観光地形成過程の歴史学的研究	高橋 陽一 助教
	若手研究(B)	漢人商業地区「買売城」から見る清代モンゴルの経済構造	佐藤 憲行
	若手研究(B)	近代ロシアにおける正教系定期刊行物と世論形成との関係についての研究	巽 由樹子
	若手研究(B)	中国における定住政策とエスニックカテゴリーの変遷—山地民、水上居民を対象として	稲澤 努
研究活動スタート支援	現代韓国のまちづくりにおける負の遺産とガバナンスに関する調査研究	金 賢貞 助教	
特別研究員奨励費	リソソバ上科貝類とその共生微生物における洞窟・地下水環境への進出と適応過程の解明	亀田 勇一	
特別研究員奨励費	近縁種間における生殖隔離の成立と維持機構の研究	森井 悠太	
特別研究員奨励費	国際制度間の相互連関に関する研究：クリーン開発メカニズムを事例に	金本圭一朗	
特別研究員奨励費	微小地域の微小貝における種分化プロセスの解明	和田慎一郎	
特別研究員奨励費	繁殖形態の多様性と熱帯における多種共存メカニズム	鈴木 紀之	
特別研究員奨励費	日本の気候変動政策の意思決定過程におけるマスメディアの役割とその影響に関する研究	朝山慎一郎	
特別研究員奨励費	ポスト近代社会における中間集団としての宗族組織の社会人類学的研究	小林 宏至	
研究成果公開促進費(学術図書)	(刊行物名) 清朝宮廷演劇文化の研究	磯部 彰 教授	
研究成果公開促進費(学術図書)	(刊行物名) Arctic Pastoralist Sakha: Ethnography of Evolution and Micro-adaptation in Siberia	高倉 浩樹 教授	
研究成果公開促進費(データベース)	(データベース名) 東アジア出版文化研究資料画像データベース	磯部 彰 教授	
その他競争的資金	受託研究	宮城県被災民俗文化財調査成果公開事業	高倉 浩樹 教授
	受託研究	大気汚染物質削減交渉に資するコベネフィットアプローチの制度設計に関する研究 —地球環境研究総合推進費—(再委託)	明日香壽川 教授
	受託研究	電磁波を用いた建造物非破壊センシング技術の研究開発 課題ア：建造物非破壊センサーの研究開発 副題：構造物評価用3次元イメージングレーダ技術の開発	佐藤 源之 教授
	受託研究	電磁波を用いた建造物非破壊センシング技術の研究開発 課題イ：建造物非破壊診断技術の研究開発 副題：3次元イメージングレーダを用いた構造物評価に関する研究	佐藤 源之 教授
	受託事業	日本学術振興会・二国間交流事業 西シベリアの河口域生態系における食物網内の吸虫類寄生虫の摂食リンク	鹿野 秀一 准教授
	寄附金	特例民法法人上廣倫理財団・上廣歴史資料科学研究部門(寄附講座) 題目なし	平川 新 教授
	寄附金	公益財団法人 東レ科学振興会・東レ科学技術研究助成 「新種の火山から放出される二酸化炭素と地球の炭素循環」	平野 直人 准教授
	寄附金	財団法人東北開発記念財団 平成25年度海外派遣援助 題目なし	稲澤 努
寄附金	トヨタ財団・トヨタ財団2011年度研究助成プログラム 震災後の東北地域における「多文化共生」と「トランスナショナル・家族」の可能性に関する考察	李 善姫	





Division of Russian and Siberian Studies

ロシアの東方から  
スターリン体制の  
深化・発展を考察する

中国共産党の単一支配、南北朝鮮の分断など現代の東北アジア情勢の理解には第二次大戦前の時代に遡り歴史を検証する必要がある。ソ連のスターリン体制がこの地域に及ぼした影響は、北方領土問題はいまでもなくきわめて重大である。一方で、このスターリン体制の深化・発展は内的要因だけでは説明できない。日本による『満州国』樹立に対抗してモンゴル、新疆の状況に深く介入していく過程をすでに明らかにしたが、これは戦後の冷戦、東欧への勢力圏拡大の先行事例として有益だろう。現在、ソ連東部における物的・人的な総動員体制の確立、中央による極東地方の集権的統治の実態等について、モスクワのソ連共産党、政府、軍、外務省等の中央の公文書館、極東やシベリアの公文書館で収集する一次史料をもとに研究を進めている。



寺山 恭輔教授  
てらやま●きょうすけ  
ロシア・ソ連史 日露・日ソ関係史



ソ連時代のプロパガンダポスター

《主な研究テーマ》

- スターリン時代を中心とするソ連政治史の研究
- 日ソ関係の研究
- ロシア・ソ連国境における民族政策（フィンランド、ポーランド、シベリア、極東等）に関する研究
- ブーチン時代を中心とする現代ロシア政治に関する研究
- ロシア、ソ連の検閲に関する研究

北極圏先住民の狩猟牧畜適応への  
環境人類学的分析と応用映像実践

ロシアを理解するためには、ユーラシア大陸北部の大半をしめるこの国家に、現在200近くの民族集団が暮らしていること、かつて中央アジア及びアラスカにまで広がる植民地を持っていた歴史を視野に入れなければならない。シベリアは、この点で現在においても内国植民地である。そこは、数多くの先住民が暮らす空間であると共に、豊富な天然資源を基盤にした経済開発が進行する地域だからである。シベリアの人類学の射程は、こうした民族・宗教問題を含めたロシアの社会文化的文脈の発掘に向けられている。と同時に、北極圏を含む厳しい環境のなかで住民が構築してきた生態学的適応の文化的側面に肉迫する。



高倉 浩樹教授  
たかくら●ひろき  
社会人類学 シベリア民族誌



ロシア・ベルホヤンスク山脈東麓のエヴェンキ牧夫がトナカイを捕獲する

《主な研究テーマ》

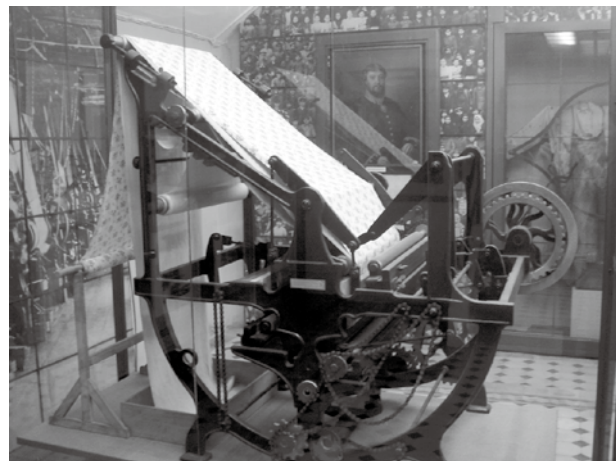
- 北極狩猟牧畜の生態人類学的研究
- 映像・展示を用いた公共人類学
- スラブ・ユーラシア世界におけるナショナリズムと先住民運動
- サハ人の歴史と文化についての民族学的研究
- 環オホーツク海域の歴史人類学
- ロシアと日本の人類学史

## ユーラシア大陸の歴史・文化・ 商業ネットワーク経済の観点から

19世紀にロシアが工業化を進めていた時代に、その工業製品がどのように生産され、どのような商人が流通を担い、アジア市場に輸出していたか、また、アジアの消費者はどのようにその工業製品を受容したのかについて研究している。私の対象とする「アジア」には、ペルシア、中央アジア、中国が含まれる。当時、ロシアの工業製品は、アルメニア商人によりペルシアへ、プハラ商人により中央アジアへ、山西商人により中国へ運ばれた。ユーラシア大陸におけるロシアとアジアとの国際関係の歴史を検証することで、今後のユーラシア大陸における国際関係を展望する際の視座を提供したいと考えている。



塩谷 昌史 助教  
しおたに ● まさちか  
ロシア経済史  
ロシアとアジアの経済関係



19世紀にイヴァノヴォ（ロシア）で使用されていた力織機

## 東北アジア地域における 諸民族の文献・文字・言語の研究

東北アジア地域には固有の言語と文化をもつ数多くの民族が居住しており、それぞれの民族は長い歴史の中で統合と分散を繰り返し、互いに大きな影響を及ぼし合ってきた。これらの民族の言語を個別に、また諸言語相互の関係の中で取り上げて歴史的・記述的な研究を行っている。

研究対象のひとつであるモンゴル諸語はモンゴル高原を中心に北はバイカル湖沿岸から南は中国青海省の黄河流域に至るまで広く分布しており、13世紀のモンゴル帝国以来、様々な文字で記録された多様な文献資料が残されている。



栗林 均 教授  
くりばやし ● ひとし  
言語学・音声学 モンゴル語学



モンゴル文字、パルシ文字、アラビア文字、漢字、漢洲文字で書かれたモンゴル語文献資料

### 《主な研究テーマ》

- ロシアを中心としたグローバル・ヒストリーの研究
- ロシアの帝国統治の解明と、他の諸帝国との比較分析

### 《主な研究テーマ》

- モンゴル系諸言語の記述的研究
- モンゴル語比較言語学
- モンゴル語史の研究
- モンゴル文献学研究
- モンゴル語と周辺言語との言語接触の研究



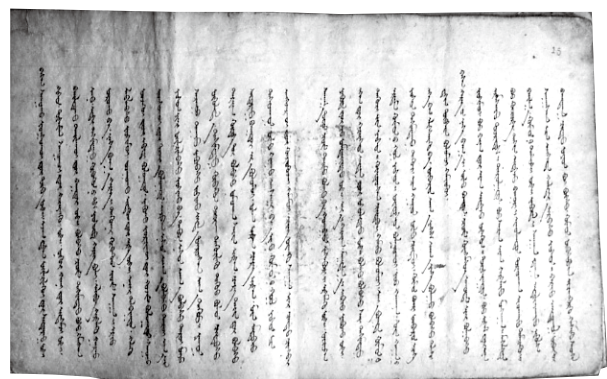
## 東北アジア地域における モンゴル遊牧民社会の歴史的研究

遊牧生産を基盤とするモンゴルの社会構成は、清代の社会・統治枠組みの基盤の上に、社会主義期の改編を経て、現在に至っている。かかる観点から、以下の研究を進めている。

- ①モンゴルにおける前近代基層社会構造の研究。とくに清朝が導入した盟旗制度と呼ばれる統治構造と、モンゴル在来のタイジ(王族)・属民の主従関係に基づく社会構造(オトグ・バグ)の関係、および清朝統治の特質の解明。
- ②19世紀「教訓書」「布告文」と呼ばれる史料群を用いた近代直前のモンゴルの社会変容の解明。
- ③社会の様々な動きと環境変動との関わり、とくに雪害・旱害時におけるモンゴル社会の対応メカニズムの研究。



**岡 洋樹**教授  
おか●ひろき  
東洋史 モンゴル史



ブレヴジャヴ布告文

### 《主な研究テーマ》

- 清代ハルハ・モンゴルにおけるオトグ・バグ組織の研究
- 19世紀ハルハ・モンゴルの教訓書・布告文の研究
- 清初モンゴルにおける清朝統治の確立過程の研究
- 清代における旱雪害発生と社会対応に関する研究

## 中央アジア諸民族間共用語としての ロシア語の特徴と変容の研究

中央アジアでは様々な民族がモザイク状に住み、言語境界と国境線は一致しない。ソ連崩壊後20年を経ても多様な民族間の唯一の共通語として機能しているのはロシア語であり、それは民族語とのコードスイッチングという文脈で用いられる。現在、脱ロシア化・民族主義化の傾向に加え経済不振による教育の貧困化によりロシア語を解さない民族語単一話者の比率が高まっているが、それは同時に言葉の通じない同国人の増加でもある。中央アジアのロシア語がこの状況下でいかなる特徴を持ち、いかに変化するのか、今後いかなる地位を得るのか、あるいは衰退して消滅に至るのかを現地調査に基づき研究している。



**柳田 賢二**准教授  
やなぎだ●けんじ  
言語学 ロシア語学  
言語接触の研究



中国語北方方言由来の言語を話すドゥンガン人の「文化の日」。キリル字で「文化」という語が書かれている。

### 《主な研究テーマ》

- 言語接触と言語変容に関する研究
- 多言語使用とコードスイッチングの研究
- 現代ロシア語に関する音声学・音韻論的研究

## 演劇を中心とした官民の 出版文化研究

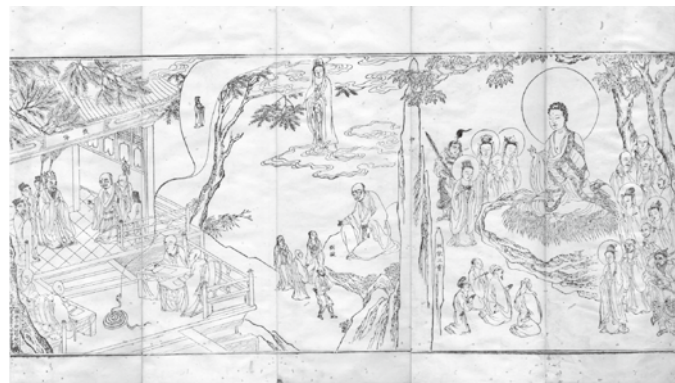
中国で本格的に開始された木版による出版は、東アジア世界の文化のみならず社会のあり方も変えた。木版を主とした出版文化の果たした役割を探ることは、今日のネット情報による社会変革を予測する上で一つの先行モデルとも言える。

そのため、十世紀以降の東アジアでの出版文化の展開について、出版システム・出版物・政治動向・出版環境・文化交流などを統合した形で研究をしている。一方、清朝宮廷で行なわれた演劇は、元明時代の『三国志通俗演義』や『水滸伝』、『西遊記』などの小説を改変したものを中心に国家儀式の一環として行っていた。東アジア出版文化や清朝宮廷演劇に関する研究拠点を構築しつつ、国内・国外の研究者と協力して研究を進めている。



磯部 彰教授  
いそべ●あきら

中国文学 東アジア文化史



陳龍泉刊『慈悲道場懺法』:

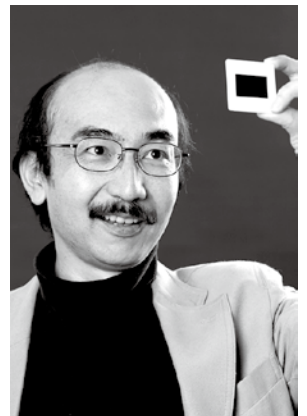
明の萬曆辛亥歲(1611年)に蘇州の經房と呼ばれる宗教經典専門出版社から、徐家の寄進によって出版された仏典の一種。

### 《主な研究テーマ》

- 清朝宮廷演劇文化の研究
- 『西遊記』と東アジア世界
- 江戸時代の藩校と蔵書・教育
- アジア(東北～東南アジア)出版文化の研究

## 現代中国における親族組織・ 宗族(そうぞく)の復興現象と それが意味するもの

改革開放政策以降の中国南部農村に続々と復興した宗族(そうぞく)組織。父系の親族が集落をつくって集居し、ともに祖先の墓や位牌を祭る。それは一見、高度経済成長を続ける現代中国には不釣り合いなアナクロニズムにも思えるが、近年の経済発展で得た富の社会的名声への変換、文革時代に破壊された人間関係の修復、あるいは中華文明の悠久の歴史と自己の祖系を同一視しようとする愛国主義的思潮など、多様に現代的な意味づけを施され再解釈された宗族の姿がそこには見いだされる。こうした現代中国の隠れた一面を、現地でのフィールドワークに基づく個別具体的な事例分析から明らかにする。



瀬川 昌久教授  
せかわ●まさひさ

文化人類学 華南地域研究



系譜を広げる(海南省儋州市)

### 《主な研究テーマ》

- 親族関係と社会組織
- エスニシティ
- 華南地域研究



## 国際協力の側面から研究する 環境問題およびエネルギー問題

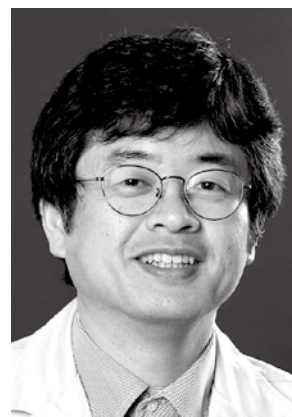
経済発展の目覚ましい東アジアを中心とする東北アジア地域の環境問題およびエネルギー問題に関して、その実態および歴史的経過を解明するとともに、現在この地域でどのような国際協力が可能か等の問いについて総合的かつ多角的に研究を行う。特に、地球温暖化問題のような、一国だけでは解決できない問題における条約、議定書、そして環境税や排出量取引などの国内外における具体的な制度設計や政策のあり方に関して、政治学、経済学、社会学などの社会科学の側面から追求する。



**明日香 壽川**教授  
あすか●じゅせん  
環境政策論

## 文献考証とフィールドワークで 分析する多民族国家中国の近現代

東北アジア地域にはさまざまな民族集団が存在し、広範な領土を有する中国も多民族国家という側面を持っている。帝国体制の終焉によるゆるやかな地域統合の解体から国民国家建設を通じての領域的・人的再統合に向かうという近現代中国の歴史的流れの中で、諸民族の統合は重要な問題の一つであり、また今日にいたるも依然重要性を帯びている。こうした近現代中国における民族問題について、国内外で所蔵されている文献資料の収集・分析とフィールドワークによる実態理解という手法を組み合わせることで、東北アジアの多民族社会に対する理解を一層深め、さらには東北アジアの民族共生に貢献することを目指す。



**上野 稔弘**准教授  
うえの●としひろ  
中国現代史 中国民族学



2000年オランダハーグで開催された:気候変動枠組み条約締約国会議  
(Photo courtesy of Leila Mead/IISD 撮影)



復元された中国の歴史的景観(北京)

### 《主な研究テーマ》

- 中国の環境問題およびエネルギー問題
- 地球温暖化問題
- 国際環境協力
- 排出量取引
- 環境税

### 《主な研究テーマ》

- 中国近現代の国民国家建設過程における民族統合問題の研究
- 中国における民族関係の形成とその変遷の研究
- 東北アジア地域における諸民族の社会的動態とその民族的アイデンティティの研究

## 東北アジア地域の重要な食料である 漁業資源の国際管理を評価する

東北アジアだけでなく、海を持つ国の多くの人々は漁業資源を主なタンパク源として食している。今では、日本だけでなく、中国、台湾、韓国などが世界の主要な漁業国となっている。その漁業資源の国際管理は多くが失敗に終わっている。それは漁業資源の多くが非排他性・競合性を特徴として持ち、いわゆる「共有地の悲劇」が起こっているからである。研究テーマとしては、漁業資源の中でもとりわけ乱獲の恐れがあるマグロに焦点をあて、その「共有地の悲劇」をもたらしている交渉の要因、そして、失敗といっても、どこがどの程度失敗しているのか、といったことを明らかにしていこうと思っている。



石井 敦 准教授  
いしい●あつし

国際関係論 科学技術社会学



中朝国境を流れる豆満江：環境再生と国際管理の構築が課題となっている

### 《主な研究テーマ》

- 北朝鮮の環境問題
- 科学技術社会学と国際関係論の融合(外交科学)
- 炭素隔離技術の社会的側面
- 越境性酸性雨問題における国際交渉・環境協力(欧米アジア)
- 国際環境レジームにおける科学アセスメント
- 国際漁業資源ガバナンス

## 東北アジア生物多様性研究

生物に多様性が生まれ維持される仕組みを理解することにより、その価値と機能を知ることができる。そして生態系の未来予測と適切な管理のための方法を開発することができる。生物多様性は現在、グローバルな環境変化、開発による生息場所の喪失、外来種の侵入などにより、急速な減少に直面しているが、特に東北アジア地域の生態系は、急速な経済発展により現在世界で最も危機にさらされている生態系である。この地域の生態系の価値を明らかにすることは、急務の課題である。東北アジア地域の生物多様性の実態を解明すること、そしてその保全に貢献することを目指して研究を進めている。



千葉 聡 教授  
ちば●さとし

生態学 保全生物学 進化生物学



内モンゴルでの湿地生態系調査

### 《主な研究テーマ》

- 島嶼生物学
- 東北アジア生態系の保全
- 多様性進化のプロセス



## 東北アジアの湖沼、湿地などの 水界生態系の生物群集と食物網

水界生態系では、様々な生物が食う食われる関係を介して食物網を形成している。これらの食物網は、植物・動物プランクトンやそれらを食べるプラントン食性魚、さらに魚食性魚などの主要なメンバーから成り、それらについては多くの研究が行われている。一方、近年これらに加えて微生物由来の有機物を起点とする食物連鎖や、今までほとんど考慮に入れられていなかった寄生虫などを組み入れることの重要性が認識され始めている。これらのテーマを研究するため、様々な塩分環境がみられるロシア西シベリアの内陸性塩性湖沼群（チャーニー湖）、ラムサール条約締結地のひとつである宮城県の伊豆沼・内沼や、海水と河川水の影響がある干潟や湿地などの水界生態系において、炭素・窒素安定同位体比の分析による食物網解析や、DNA塩基配列をもとに系統分類をすることによる微生物群集解析を行っている。



鹿野 秀一准教授  
しかの●しゅういち  
微生物生態学 システム生態学

## 日本と大陸の地質のつながりと 岩石の形成過程を研究する

日本列島は環太平洋造山帯に属し、ロシア極東地域と共通の地質構造をもつ。そして日本列島の基盤の形成には、中生代初期の北中国大陸と南中国大陸の衝突による造山運動が深く関わっている。また、日本列島の大陸からの分裂には日本海拡大に伴う大規模なマグマ活動が関わっている。これらの観点から、東北アジア各地の地質や岩石の調査を進めている。オフィオライトや緑色岩は過去の海洋底の地殻とマントルが造山運動によって地表に露出したもので、高圧変成岩はプレート沈み込み帯の深部から上昇してきたものである。これらを研究することにより、造山帯の構造発達過程や地球の大規模なテクトニクスとマグマ活動の歴史を明らかにすることができ、資源開発への貢献も期待される。



石渡 明教授  
いしわたり●あきら  
地質学 岩石学



チャーニー湖における生物調査風景



ロシア極東コリヤーク山地北部・ベクルニー山脈の調査地

### 《主な研究テーマ》

- 湖沼生態系の微生物群集
- 微生物の食物網への寄与
- 西シベリア・チャーニー湖沼群の魚類を含めた食物網
- 食物網における寄生虫のリンク

### 《主な研究テーマ》

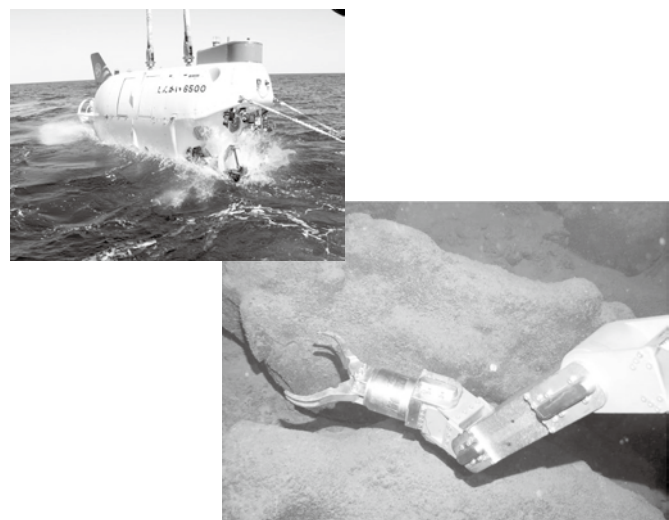
- 日本、モンゴル、ロシア極東のオフィオライトと緑色岩
- 東北アジアの変成帯と付加体の地質及びそのつながり
- 日本海拡大に関連するグリーンタフ火山活動

## 新種の火山・プチスポットの成因と地球の二酸化炭素放出量

沈み込む海洋プレートの屈曲場で活動し、2006年に三陸沖で発見された新種の火山(プチスポット)は、近年チリ沖や西太平洋の深海底でも続々と見いだされている。このような深海底は、古いプレートで構成されているため、これまでは火山活動が起こり得ない場所と考えられていた場所である。同火山は、カムチャツカ沖、日本海、極東ロシアなどにも存在している可能性があり、それらの噴出物から放出される成分によっては、地球の二酸化炭素放出量をも再考する必要がある。また、過去の海洋底が現在陸上に露出する場所(根室、歯舞、サハリンなど)の調査も進めている。



**平野 直人** 准教授  
ひらの●なと  
海洋底科学 テクトニクス  
地質年代学 岩石火山学



潜水調査船「しんかい6500」と、岩石試料採取の様子。  
(海洋研究開発機構、米科学振興協会提供)

### 《主な研究テーマ》

- 海底火山および付加体中の火山岩の成因解明
- 新種の火山・プチスポットの二酸化炭素放出量
- 新種の火山・プチスポットの世界的普遍性
- 西太平洋プレート上の海山群の形成史

## 火山噴火の特徴を決める要因を実験や観測をもとに研究する

日本やカムチャツカをはじめ、東北アジア地域には多くの活火山が存在する。火山噴火の特徴はマグマの性質に大きく左右される一方で、同じようなマグマで異なるタイプの噴火が起こったり、さらには同じ火山で時間とともに噴火の様子が変化するなど、その個性が何に支配されているかは必ずしも明らかでない。この謎を解明するために、マグマの物理的性質の測定や、噴火を模擬した実験、また実際の火山で噴火の観測を行っている。得られた結果は、噴火様式と周囲への影響の関係を明らかにし、日本のような人口密集地域での防災に役立つと期待されている。



**後藤 章夫** 助教  
ごとう●あきお  
火山物理学 マグマ物性



北海道有珠火山金比羅山火口で発生した、ジェットを伴う水蒸気爆発

### 《主な研究テーマ》

- マグマの物理的性質の測定
- 火山爆発模擬実験
- 空振観測



## 東北アジア地域の火山の噴火史と その影響を研究する

火山噴火が発生した場合には周辺地域に多大な災厄がもたらされる。東北アジア地域には複数の火山が存在するが、噴火が自然界(人類史)に与える影響を知るためこの地域において過去にどのような火山活動を行われてきたかを、有史後に噴火したとされる中国・北朝鮮国境上の白頭山、南九州の火山を対象とした研究を行っている。特に白頭山については、過去2000年間で世界最大級の噴火とされる10世紀の噴火活動に焦点をあて、中国・北朝鮮領内でのフィールド調査を通じて噴火の推移や、噴火がもたらした自然界への影響(例えば環境変動)について検討し、次第に噴火の全貌が明らかになりつつある。



宮本 毅助 教授  
みやもと ● つよし  
火山岩石学 火山地質学

## 人工衛星を使って ロシア極東・シベリアの 環境問題を解明

地球温暖化の原因とされている二酸化炭素を大規模森林火災の管理により大幅に削減する構想をロシアの森林火災を事例として、火災の早期発見方法の開発を行っている。一方では、PM2.5を含む越境大気汚染や黄砂の実態を可視化し、その影響を評価する方法の開発を行っている。いずれも、人工衛星からのデータを直接受信し、問題解決のアルゴリズムを開発する研究であり、ロシア科学アカデミーと緊密に連携を取りながら行っている。

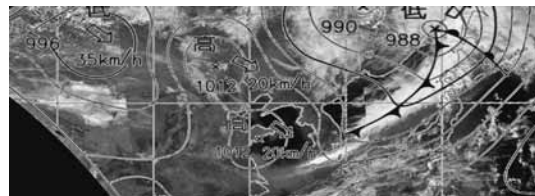
図1の事例(2013年4月14-15日)は、大陸の低気圧で黄砂が発生して、そのまま移動。その前に高気圧があり、そこに汚染物質があるので、黄砂は汚染物質に取り込まれ、その汚染物質が日本に向かって動き始めている様子が大変よく分かる。



工藤 純一 教授  
くどう ● じゅんいち  
環境情報学  
デジタル画像理解学



西側山頂から見た白頭山天池カルデラ。対岸中央部に中朝国境が位置し、右が北朝鮮領。(長瀬敏郎撮影)



Aqua-MODISによる(2013.04.14)



図1: Aqua-MODISによる(2013.04.15)

### 《主な研究テーマ》

- 白頭山10世紀巨大噴火の噴火推移の解明
- 白頭山の過去数千年間の噴火史の再検討
- 火山噴火と火山伝承に関する研究
- 鳥弧火山(日本地域)におけるマグマ発達史

### 《主な研究テーマ》

- IKONOS衛星画像の融合処理に関する研究
- 大規模画像データベース構築に関する研究
- 大規模森林火災の管理による二酸化炭素削減構想
- PM2.5を含む越境大気汚染や黄砂の衛星画像可視化研究

Division of Geoscience and  
Remote Sensing

電波科学による  
防災・減災と環境保全

電波を利用した地球観測には衛星・航空機合成開口レーダー(SAR)や地表測定用地中レーダー(GPR)など、多様なレーダー装置が利用されている。私達は電波で地中を視るGPRと衛星から観測するSARを組み合わせ、環境保全を目的として地下水や土壤水分を計測する研究を、モンゴル、ロシア、中国、韓国などの東北アジア地域を対象に行ってきた。一方、最先端GPR技術を利用して我々が開発したALIS(エーリス)はカンボジアで80個以上の地雷を除去する成果をあげている。国内では地表設置型合成開口レーダー(GB-SAR)による地滑りモニタリングを栗原市で2012年から継続しているほか、津波被災地の住宅高台移転に伴う緊急遺跡調査へのGPR技術の供与など、電波科学による積極的な防災・減災への取り組みを続けている。



佐藤 源之教授  
さとう ●もとゆき

電磁波応用工学 地下電磁計測



GPRによる地下水計測  
(モンゴル・トール川流域)



カンボジア地雷原で活躍する  
ALIS



GPRによる遺跡計測  
(埼玉県・さきたま古墳)

《主な研究テーマ》

- カンボジア地雷除去
- GPRによる遺跡調査、震災復興支援
- GB-SARによる地滑りモニタリング
- SARとGPRを組み合わせた地下水・土壤水分計測

電磁波を活用した  
非破壊環境計測

地中レーダーは電磁波を使って地中の構造・状態の評価や可視化が可能なツールであり、私たちは様々なタイプ・用途のレーダーや計測手法、解析手法の開発を行っている。また、地中レーダーは地中からの電磁波の反射を計測するため、土壤性質や不均質による影響を受ける。この土壤性質による地中レーダーへの影響を明らかにすることで、地中レーダー計測によって土壤特性を知ることができ、土壤やそれをとりまく環境の計測やモニタリングに応用することができる。このような手法の研究を継続していくとともに、環境計測への応用を行い、東北アジア地域における環境問題への応用をめざす。



高橋 一徳助教  
たかはし ●かずのり

電磁波計測 応用地球物理学



岩塩坑におけるレーダー計測  
(ドイツ)

氷上での地中レーダー計測  
(サロマ湖)



《主な研究テーマ》

- 地中レーダーによる土壤評価
- 不均質土壤による電磁波散乱
- 地上設置型合成開口レーダーによる災害検知



## 地中レーダーを用いた 遺跡探査と災害考古学 —震災復興への貢献

地中レーダー(GPR)技術は、非開削で地下の様子を知ることができる計測技術です。地中レーダーによる遺跡探査は、東日本大震災の被災者が仮設住宅から移転する際の高台調査に実用され、復興の加速に貢献しています。

私は縄文時代以降の遺跡立地変化を、地理情報システム(GIS)を用いて研究してきました。集落遺跡の立地・竪穴住居跡などの遺構配置の変化を分析し、当時の人々が厳冬期の卓越風・地震・古津波の襲来・火山灰降下などの環境変動や災害に、どう対処したのかを明らかにしてきた経験をGPRの遺跡探査に役立てたいと考えております。



**駒木野 智寛** 助手  
こまぎの●ともひろ

GPRによる遺跡探査 災害考古学  
地理情報システム(GIS)

## 変動する東アジアの地域社会 地域社会をつくるのは 「だれ」なのか。

韓国の市民運動は中央政府をターゲットにしたものが多く、背景には依然として中央集権的な韓国の政治・社会システムがあるといわれる。しかし地方自治法が改正され、90年代後半以降、国家権力から独立した地方のあり方が問われ、各地域社会の「自治」が重要課題となった。日本では、各神社が一宗教法人になってからも神社の祭りの主体が町内会などの地域集団であることが多く、様相が異なる。東アジアの中で暮らしやすい地域づくりがどう行われているかを市民参加、調整・協同を促すネットワーク、そして合意形成に照射するコミュニティ・ガバナンスのパースペクティブから研究する。



**金 賢貞** 助教  
キム●ヒョンジョン

民俗学 日韓比較社会・文化論



山形県飛島西海岸。古代には製塩も行われていたが、現在は東海岸のみに集落がある。(2013年5月撮影)



祭りをとおして「全町和楽」を学び、経験する



韓国のまちづくりに活かされる日本植民地期の「敵産家屋」通り

### 《主な研究テーマ》

- 気候変動と遺跡立地
- 竪穴住居の形態変化
- 歴史地震と被災遺跡

### 《主な研究テーマ》

- 現代日韓社会におけるコミュニティ・ガバナンス
- 現代祝祭文化
- 日韓文化政策の比較研究
- 災害とコミュニティ



## 近世日本列島の 経済交流を明らかにする

私は、18世紀から19世紀にかけての日本経済の歴史について研究をしている。研究方法は、当時の文献資料(「古文書」)の内容を具体的に分析することから始まる。また、文献だけではなく、フィールドワークやインタビューも含めて、豊かな歴史像の構築を目指している。現在は、①経済都市大阪がどのような歴史的経過を歩んでいくのか、②日本海航路を利用した商業活動(北前船)について、③宮城県の地域史分析、の3点を中心に取り組んでいる。日本列島のさまざまな地域が経済的につながっていたことを実証し、当時の人々のありようを考察する。これらをもとに、新しいアジアの経済史を描きたい。



**荒武 賢一朗**准教授  
あらたけ ●けんいちろう  
日本近世史 経済史 都市史



江戸時代の「客船帳」  
(山形県立博物館)



江戸時代の商家(静岡県湖西市)

### 《主な研究テーマ》

- 近世都市をみる視点
- 沿岸社会と経済交流の歴史
- 日本列島市場論の提起と近世流通市場

## 日本近世旅行史の研究

—旅の記録と地域の古文書分析から—

日本において、身分階層を問わず人々が各地を旅することができるようになったのは、近世(江戸時代)からであると言われる。徒歩による数ヶ月に及ぶ移動、関所・番所や山間部・海岸部の険阻な難所の通行、雄大な自然景観との邂逅。こうした現代にはみられない旅の特徴的な諸要素について、紀行文や道中日記といった記録を解析し、近世の旅の歴史的特質に迫る。また、代表的な旅先の1つである温泉に残る古文書の分析から、地域住民による旅行者への対応や温泉の資源的活用の特質を解明する。この2つの作業を基軸に、旅や人の交流といった観点から日本社会の展開を捉え直したい。



**高橋 陽一**助教  
たかはし ●よういち  
日本近世史 旅行史



旅行者が書き残した挿絵入りの紀行文  
(『陸奥紀行』東北大学附属図書館)



地域に残る古文書  
(宮城県柴田郡川崎町青根温泉 佐藤家文書)

### 《主な研究テーマ》

- 日本近世旅行史の研究
- 仙台藩地域社会史の研究
- 歴史資料保全活動の実践に関する研究

## 米沢藩出身の一中堅官僚から 近代の東北・日本・東アジアを とらえなおす。

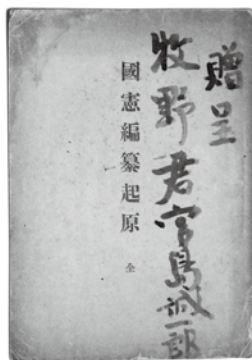
宮島誠一郎(1838~1911)は、幕末、米沢藩の周旋方として情報収集や他藩との折衝に当たり、維新後は「朝敵藩」出身であるにもかかわらず明治政府に登用された。明治5年(1872)に宮島が起草した「立国憲議」は先駆的な立憲政体論として知られる。戊辰戦争は彼にとっていかなる意味を持つ経験だったのか。敗戦を経て、いかにその国家構想を紡いだのか。ここに宮島を追う私の旅がはじまった。また、ロシアへ警戒心を抱き続けた宮島は、清国公使と交わりを深め日清両国の融和にも尽力した。両国の対立に翻弄される宮島の姿は、激動の東アジア情勢を映し出す。宮島は19~20世紀の東アジアへと私を誘おうとしている。



友田 昌宏 助教  
ともだ ●まさひろ  
日本近代政治史



左院時代の宮島誠一郎



宮島誠一郎が編纂した『国憲編纂起原』(元真社、1905年)。左院時代の彼の活躍が垣間見られる

## 各種研究員の研究

### 教育研究支援者

稲澤 努 いなざわ ●つとむ  
文化人類学

中国の水上居民、山地民を研究対象として、彼らへの定住政策とエスニックカテゴリーの変遷を研究している。

巽 由樹子 たつみ ●ゆきこ  
ロシア史 文化史

ロシア帝国の出版メディアと読書文化を分析することで、ツァーリ専制国家と近代社会との関係を考察する。

滝澤 克彦 たきざわ ●かつひこ  
宗教学

ポスト社会主義期モンゴル国の宗教的状況についてキリスト教福音派の流行という現象を通して研究している。

ツォグバドラフ ガンツェツェグ

Tsogbadrakh Gantseteg  
言語学 モンゴル語学

現代モンゴル語、特に、モンゴル国のハルハ方言を対象として言語と文化の接触について研究している。その中で、モンゴル語の使役文と受身文の研究をしている。

麻田 雅文 あさだ ●まさふみ  
ロシア史 中露国際関係

20世紀の中国東北(満洲)における、国際政治経済史が専門。ロシア帝国/ソ連の極東政策全般も扱う。

### 産学官連携研究員

コヤマ クリスマン ナオヒデ  
Koyama Christian Naohide

レーダー・リモートセンシングの応用

偏波合成開口レーダー(PolSAR)による地球観測と地球物理諸量の推定。電波による建造物の非破壊検査技術の開発。

劉 海 りゅう ●はい

電磁波を用いた非破壊センシング技術の研究開発

建造物非破壊検査と遺跡調査など地下構造推定のための地中レーダーや地表設置型合成開口レーダーのシステムとアルゴリズムの開発。

盧 向春 る ●こうしゅん  
環境経済学

経済活動を環境に与える影響について、定量的な分析手法を用いて、地域およびグローバルにおいて最適な対策を講じるための研究。

#### 《主な研究テーマ》

- 東北からみた明治維新
- 旧藩意識と近代の国家・地域
- 19~20世紀の東アジア情勢と日本における興亜論の展開
- 日本における近代国家形成と漢学者



## 研究支援者

**木村 一貴** きむら●かずたか

地域生態系（進化生態学専攻）

カタツムリを主な材料として、種の多様性がどの様に創出・維持されているのかについて研究を行っている。

## 専門研究員

**張 政** ちょう●せい

文化人類学 博物館学

博物館学中華人民共和国東北部における狩猟採集民オロチョンを対象に、集団構成員の流動的变化とそのメカニズムを研究している。

**青木 雅浩** あおき●まさひろ

モンゴル近現代史 東北アジア国際関係史

ロシア、モンゴルの公文書を利用した、20世紀前半のモンゴルを中心とした東北アジアの政治情勢の研究

**トゥルムンフ オドントヤ**

Turmunh Odontuya

文化人類学 モンゴル研究

社会体制変化下のモンゴルにおけるジェンダー問題、家庭における男女の性別分業の変遷に関して研究している。

**佐藤 憲行** さとう●のりゆき

東洋史 清代モンゴル史

清代モンゴル社会におけるモンゴル人と漢人との双方向・重層的関係を明らかにすることを目指している。

**李 善姬** イ●ソンヒ

文化人類学 ジェンダー研究

東アジアの結婚移住女性とコミュニティの変容に関する研究。現在は、東日本大震災地域を中心に研究を行っている。

**佐々木 聡** ささき●さとし

宗教文化史 術数文献の書誌研究

術数文献等に見える鬼神観・祥瑞災異思想の研究を通じて、中国前近代の社会通念の一端を明らかにする。

## 日本学術振興会特別研究員

**森井 悠太** もりい●ゆうた

進化生態学

東北アジア地域の陸産貝類を材料に、その形態の多様化と種分化のメカニズムの解明を目指している。

**金本 圭一朗** かねもと●けいいちろう

国際制度間の相互関連 地域間産業連関分析

CDM（クリーン開発メカニズム）を事例とした国政制度間の相互連関に関する研究。

**亀田 勇一** かめだ●ゆういち

進化生物学

陸・淡水産貝類の多様化パターンの把握と、その要因となる地史的背景や環境への適応、生殖隔離機構の解明。

**和田 慎一郎** わだ●しんいちろう

進化生態学

小笠原諸島をはじめとした島嶼の微小陸産貝類を対象に、その進化や生態について研究を行っている。

**鈴木 紀之** すずき●のりゆき

進化生態学

ロシアから琉球列島にかけて分布するテントウムシ類を対象に、ニッチや形態の多様化プロセスを調べている。

**朝山 慎一郎** あさやま●しんいちろう

環境政策論 科学技術社会学

気候変動政策におけるメディア報道のフレーミングと政策的含意に関する研究。科学、政策、メディアの相互関係に着目して研究している。

**小林 宏至** こばやし●ひろし

社会人類学

中国客家社会ポスト近代社会における中間集団としての宗族組織の社会人類学的研究。社会変化を親族から分析する。





## 出版物紹介

### 『東北アジア研究』

#### 17号 (2013) 目次

##### ●論文

- 財団法人蒙民厚生会の教育支援事業—育成学院を事例に／娜荷芽 (ナヒヤ)  
 新たな他者とエスニシティ—広東省汕尾の春節、清明節の事例から／稲澤 努  
 工藤忠資料から見た民国初年の白狼軍 (白朗軍)／山田 勝芳  
 中国失業保障の法的構造とその限界に関する研究／御手洗 大輔  
 アイスジャム洪水は災害なのか？  
 —レナ川中流域のサハ人社会における河川氷に関する在来知と適応の特質／高倉 浩樹  
 岡山県伊茂岡鉱山産三原鉱とその熱的安定性について／北風 嵐、伊東 洋典、小松 隆一

##### ●資料／研究動向

- 秋田県釈迦内鉱山産古遠部鉱について、特に古遠部鉱山産古遠部鉱との比較／  
 北風 嵐、伊東 洋典、小松 隆一

##### ●書評

- 李 福清『中国各民族神話研究外文論著目録 (1839-1990)』／山田 仁史  
 小長谷 有紀、川口 幸大、長沼 さやか編  
 『中国における社会主義的近代化 宗教・消費・エスニシティ』／中村 知子



### 『東北アジア研究センター叢書』

- 第42号 高岡市立中央図書館蔵鄭雲林刊『全像三国志伝』原典と解題 (上)  
 (磯部 彰編、2011)  
 第43号 ノマド化する宗教、浮遊する共同性 (高倉 浩樹編、2011)  
 第44号 高岡市立中央図書館蔵鄭雲林刊『全像三国志伝』原典と解題 (下)  
 (磯部 彰編、2011)  
 第45号 歴史の再定義 (岡 洋樹編、2011)  
 第46号 『達斡爾語詞彙』蒙古文語索引 附：満洲文語索引  
 (栗林 均編、2011)  
 第47号 『元朝秘史』傍訳漢語索引 (栗林 均編、2011)  
 第48号 『保安語詞彙』蒙古文語索引 (栗林 均編、2012)  
 第49号 清朝宮廷演劇文化の世界 (磯部 彰編、2012)



### 『東北アジア研究センター報告』

- 第2号 モンゴル史研究と史料 (モンゴル文) (岡 洋樹編、2011)  
 第3号 歴史遺産を未来へ (平川 新編、2011)  
 第4号 よみがえる町の記憶—通町・通町・北山界隈の歴史— (平川 新編、2012)  
 第5号 東日本大震災に伴う被災した民俗文化財調査2011年度報告集 (高倉 浩樹・滝澤 克彦・政岡 伸洋編、2012)  
 第6号 蒙文倒綱—資料編・原本影印— (栗林 均編、2012)  
 第7号 連携する研究所 (佐藤 源之、高倉 浩樹編、2012)  
 第8号 身体的実践としてのシャマニズム (岡 洋樹編、2012)

## 東北アジア読本

- 第1号 シベリアとアフリカの遊牧民—極北と砂漠で家畜とともに暮らす  
(高倉 浩樹・曾我 亨著、東北大学出版会、2011)
- 第2号 東北アジア 大地のつながり (石渡 明・磯崎 行雄著、東北大学出版会、2011)
- 第3号 途絶する交通、孤立する地域  
(奥村 誠・藤原 潤子・植田 今日子・神谷 大介共著、東北大学出版会、2013予定)



## 東北アジア専書

- 第1号 近現代中国における民族認識の人類学 (瀬川 昌久編 昭和堂、2012)
- 第2号 極北の牧畜民サハ：進化とミクロ適応をめぐるシベリア民族誌 (高倉 浩樹編、昭和堂、2012)
- 第3号 現代中国の宗教—信仰と社会をめぐる民族誌 (川口 幸大、瀬川 昌久編、昭和堂、2013)
- 出版予定/金 賢貞著 「創られた伝統」と生きる—地方社会のアイデンティティー (青弓社)  
塩谷 昌史著 ロシア綿業発展の契機—ロシア更紗とアジア商人— (知泉書館)  
山口 未花子著 ヘラジカからの贈り物：北方狩猟民カスカと動物の自然誌 (春風社)



## その他の関係著書

- SATO, Motoyuki, Ch.11 Mine Detection, In: A. S. Turk (Ed.), Subsurface sensing, Wiley, pp.743-772. [2011]
- TAKAHASHI, Kazunori, J. IGEL, H. PREETZ & S. KURODA, Basics and application of ground-penetrating radar as a tool for monitoring irrigation process. In: M. KUMAR (Ed.) Problems, Perspectives and Challenges of Agricultural Water Management, Rijeka Croatia: InTech, pp. 155-180. [2012]
- 高橋 陽一、近世の温泉利用とその特性-「養生」の勤めと旅行者。菊池 勇夫・斎藤 善之 (編) 講座東北の歴史 第4巻 交流と環境、清文堂出版、107-129. [2012]
- MARKUSSON, N., ISHII, Atsushi., STEPHENS, J., The Social Dynamics of Carbon Capture and Storage: Understanding CCS Representations, Governance and Innovation. In: N. MARKUSSON, S. SHACKLEY & B. EVAR (Eds.) Learning in CCS demonstration projects: social and political dimensions, Routledge, pp. 222-244. [2012]
- 稲澤 努、族群認同与民俗文化。房学嘉他 (編) 多元視角下的客家地域文化、華南理工大学出版社、230-249. [2012]
- 石渡 明・宮本 毅・平野 直人、仙台付近の墓石転倒率調査結果。平川 新・今村 文彦 (編) 東日本大震災を分析する1 地震・津波のメカニズムと被害の実態、明石書店、pp. 288. [2013]
- 荒武 賢一郎、近世史研究と現代社会—歴史研究から現代社会を考える—。清文堂出版、pp. 263. [2011]
- 荒武 賢一郎・渡辺 尚志、近世後期大名の領政機構—信濃国松代藩地域の研究III—。岩田書院、pp. 297. [2011]
- 石井 敦、解体新書『捕鯨論争』。新評論、pp. 321. [2011]
- 高倉 浩樹・木村 敏明 (監修)、聞き書き震災体験—東北大学90人が語る3.11。新泉社、pp. 336. [2012]
- 高倉 浩樹、極寒のシベリアに生きる。新泉社、pp. 270. [2012]
- 瀬川 昌久・飯島 典子、客家の創生と再創生—歴史と空間からの総合的再検討。風響社、pp. 240. [2012]
- 高橋 正樹・石渡 明、火成作用。共立出版、pp. 216. [2012]
- 磯部 彰、大阪府立中之島図書館蔵『昇平宝筏』(全10冊)。東北大学出版会、pp. 2912. [2013]
- 磯部 彰、東アジア典籍文化研究。塙書房、pp. 427. [2013]

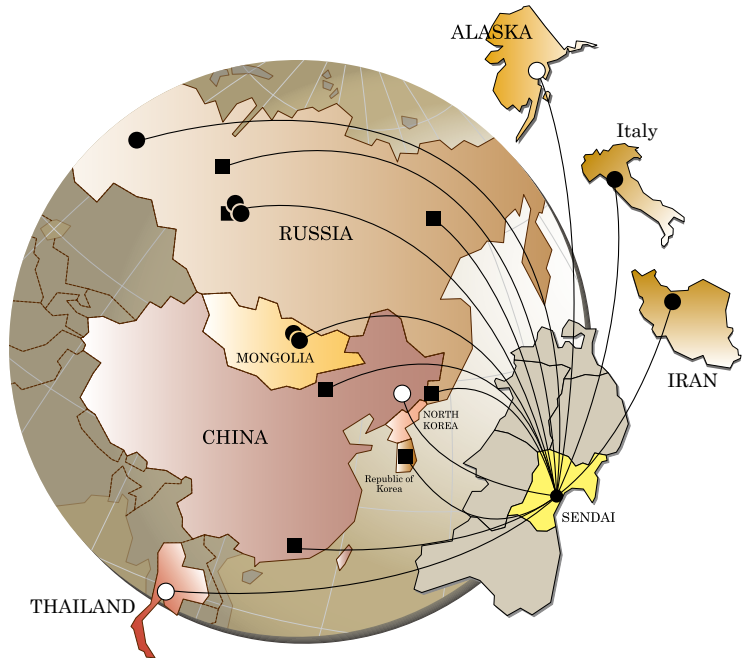


# 国際学術交流

## [ 学術協定による海外の学術機関等との連携強化 ]

### 大学間協定および部局間協定

締結年月日	相手方機関名
1992. 8.10	● ロシア科学アカデミーシベリア支部
1998.11. 9	○ タイアジア工科大学院
1999. 1.12	○ アメリカアラスカ大学
2000. 8.21	● モンゴル科学アカデミー
2000.10. 2	■ モンゴル科学技術大学ジオサイエンスセンター
2001. 3. 1	● 中国吉林大学
2001. 6.25	■ 中国広東省民族宗教研究院
2001.11.16	● モンゴル科学技術大学
2002.10. 1	■ ロシア科学アカデミー・シベリア支部 V.N.スカチョフ森林研究所
2003. 7. 4	● ロシア連邦ノボシビルスク国立大学
2005. 9. 1	■ ロシア科学アカデミー極東支部経済研究所
2008. 4. 1	■ 中国内モン古師範大学蒙古学学院
2008. 4.25	■ 韓国高麗大学校中国学研究所
2008. 4.25	■ 韓国高麗大学校日本研究センター
2008. 9.22	■ 中国内モン古大学蒙古学学院
2009. 8.21	● イタリアフィレンツェ大学
2009. 8.25	○ イランテヘラン大学
2009. 9.30	■ ロシア科学アカデミーシベリア支部人文学・ 北方民族問題研究所
2011. 9.28	■ 中国内モン古師範大学旅游学院



●:センターが世話部局となった大学間協定    ○:センターが協力部局となった大学間協定    ■:部局間協定

## 東北大学ロシア科学アカデミーシベリア支部共同ラボラトリー

東北アジア研究センターでは、1998年に東北大学初の海外拠点として、ロシア連邦のノボシビルスクにシベリア連絡事務所を開設した。ロシア国内で三番目の人口を擁するノボシビルスクにはロシア科学アカデミー・シベリア支部 (SB RAS) の本部が置かれており、同支部に所属する理系・文系あわせて75以上の研究所のうち半数以上がここノボシビルスクに集中している。シベリア連絡事務所には本センターのスタッフが駐在し、学術情報交換や共同研究の組織など、東北大学とこれら研究機関との間の交流促進に寄与してきた。2008年には、非営利団体の登録に関するロシア法改正に対応するため、東北大学とSB RASとの共同ラボラトリー (JOINT LABORATORY OF INTERDISCIPLINARY PROJECTS) に組織を改め、引き続き本センターの派遣スタッフを中心として、日本・アジア学セミナーなどの多面的な活動を展開している。



SB RAS創設者  
ラヴレンチェフ像



共同ラボラトリー  
ロビー

## [ 研究者の国際交流 ]

外国人研究者の招聘・研究者の海外派遣 (延べ人数)	(単位:人)						
	2006年度	2007年度	2008年度	2009年度	2010年度	2011年度	2012年度
外国人研究者の招聘	21	35	36	41	30	10	15
研究者の海外派遣	69	75	74	86	69	70	78

## [ 国際シンポジウム等の主催・参加状況 ]

	(単位:件)						
	2006年度	2007年度	2008年度	2009年度	2010年度	2011年度	2012年度
主催件数	2	5	2	1	1	2	2
参加件数	17	33	30	34	29	30	36





[ 公開プログラム ]

2012年度公開講演会

伊達市噴火湾文化研究所・東北大学東北アジア研究センター  
第4回学術交流連携講演会

初冬を迎えた2012年12月1日に、東北大学東北アジア研究センターと北海道伊達市噴火湾文化研究所との共催事業である、第4回学術交流連携講演会「決断の時を迎えて—アイヌ民族の〈天災体験〉と亘理伊達家中の〈移住決意〉」を、仙台市内のベルエア会館で開催した。

今回は東北アジア研究センターが講演会の担当であったことから、伊達市噴火湾文化研究所の学芸員・文化財係長青野友哉氏並びに同学芸員伊達元成氏に、火山噴火と津波、或は社会体制の激変という出来事のもとでそれを体験した近世のアイヌの人々や亘理伊達家の人々が、いかなる決断をして新たな一歩を踏み出したかについて講演をいただいた。

伊達市噴火湾文化研究所と本センターは、学術交流協定を結び、交代で相互訪問をし、講演会を開催している。今回は震災以降、仙台・亘理と北海道伊達市との連携を更に強めることを念頭に開催した。

青野氏の講演「噴火と津波を克服した近世のアイヌ民族」では、北海道伊達市の有珠地区に残るコタン（集落）跡の発掘によって、17世紀の駒ヶ岳の噴火津波及び有珠山噴火による災害の痕跡が明らかにされたこと、当時の災害からアイヌ民族の人々はいかにコタン復興をしたかが論じられた。一方、伊達氏の講演「江戸時代の亘理を復元する一海を渡った記憶—」では、明治3年に北海道への移住を決意した亘理伊達家では、北海道へ武家文化財と呼ばれる資料を携えて渡海したこと、その資料はかつての住地である亘理での生活や江戸時代の日常風景が窺えるもので、移住後の人々は、故郷の想い出の品に亘理を想いつつも、アイヌの人々の援助を受けつつその身を伊達の地でたくましく生き抜いたことについて紹介された。会場は百人を超える聴講者で満員となり、講演後も活発な質問・応答がなされた。



2012年度東北アジア研究センターシンポジウム

民俗芸能と祭礼からみた地域復興

—東日本大震災にともなう被災した無形の民俗文化財調査から

2012年度東北アジア研究センターシンポジウムは、東北学院大学、東北大学文学部との共催で、読売新聞社、河北新報社の後援のもと2013年2月23日に片平さくらホールにて開催された。本年度は「民俗芸能と祭礼からみた地域復興—東日本大震災にともなう被災した無形の民俗文化財調査から」というテーマであった。

本シンポジウムは、宮城県からの委託調査事業「東日本大震災に伴う被災した民俗文化財調査」の成果として、祭りや神楽、年中行事などに震災がどう影響したのか、そしてその復興の現在について報告を行った。

第1部では、はじめに高倉浩樹准教授による趣旨説明と調査事業報告が行われた。そののち、各担当地区の民俗文化の被災とその復興について、人類学の立場から岡田浩樹氏（神戸大学）、宗教学の立場から木村敏明氏（東北大学）、民俗学の立場から菊池暁氏（京都大学）が報告し、さらに学生の立場から沼田愛氏（東北学院大学）、行政の立場から小谷竜介氏（宮城県）が報告した。

政岡伸洋氏（東北学院大学）が司会を行った第2部では、民俗文化行政の担当者である菊池健策氏（文化庁）、齋藤三郎氏（山元町教育委員会）ならびに沼倉雅毅氏（牡鹿・白山神社笛担当）からのコメントを踏まえてディスカッションが行われた。本シンポジウムでは、「被災地」といってもその実情は多様であり、さまざまな地域復興の形があるなかで、被災前との連続性と非連続性を調査・記録することの重要性が指摘された。また、その際には、フィールドワークの専門家を集めた調査が必要であり、大きな意義をもつことが確認された。本シンポジウムは社会の高い関心を集め、来場者は160名を超えた。また、会場にて調査のプロセスや各調査担当地区の様子を展示し、多くの来場者の関心を集めた。





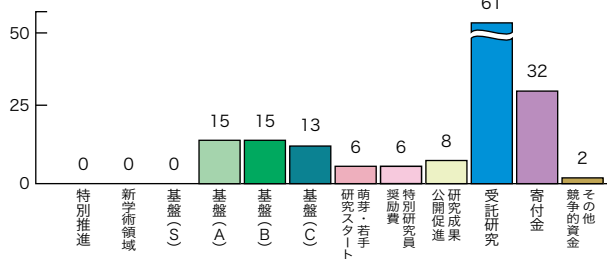
# データ編

・職員数(現員)	教授11名、准教授6名、助教7名、助手1名 計25名	・施設面積	2,843 m <sup>2</sup>
・図書室	蔵書数概算 31,000冊 登録定期刊行物 和雑誌 206種 洋雑誌 121種		

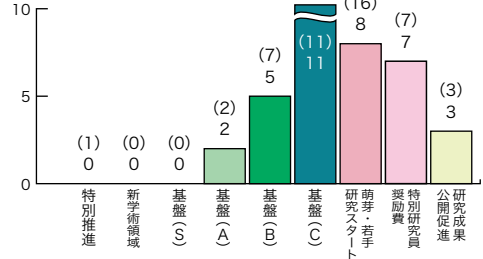
## [ 競争的資金獲得件数および採択額 ]

○2013年度 計 158 (百万円) (見込み)

○種目別獲得額(単位:百万円)

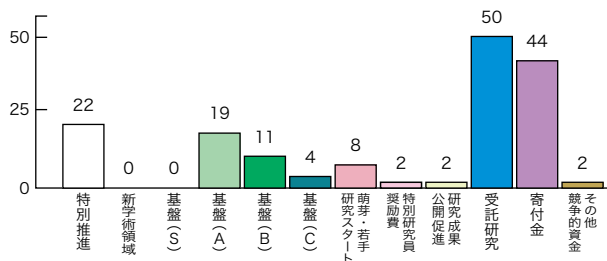


○科研費種目別(申請)採択数合計

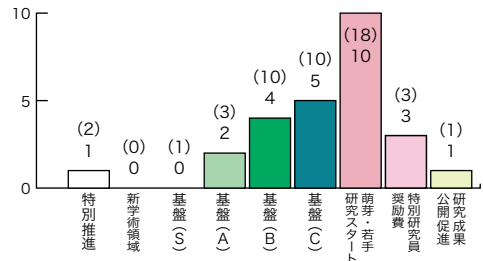


○2012年度 計 164 (百万円)

○種目別獲得額(単位:百万円)

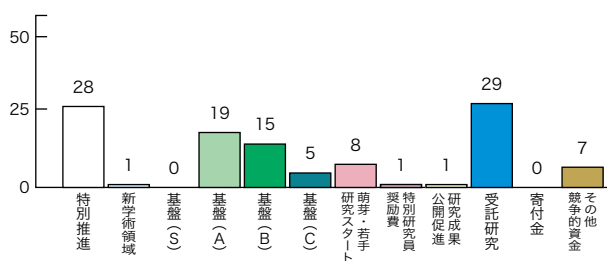


○科研費種目別(申請)採択数合計

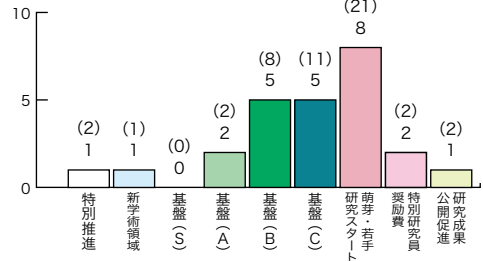


○2011年度 計 114 (百万円)

○種目別獲得額(単位:百万円)

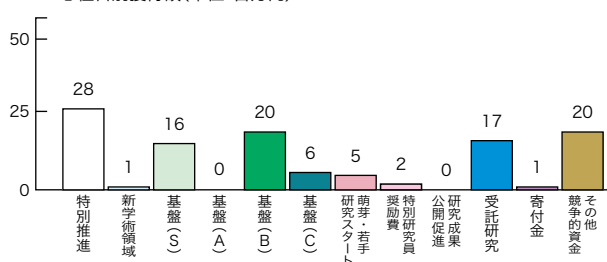


○科研費種目別(申請)採択数合計

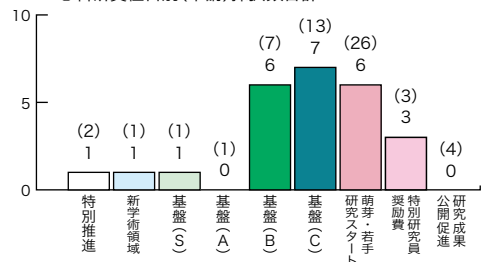


○2010年度 計 116 (百万円)

○種目別獲得額(単位:百万円)



○科研費種目別(申請)採択数合計



## [ 部局別大学院生の受入状況 ]

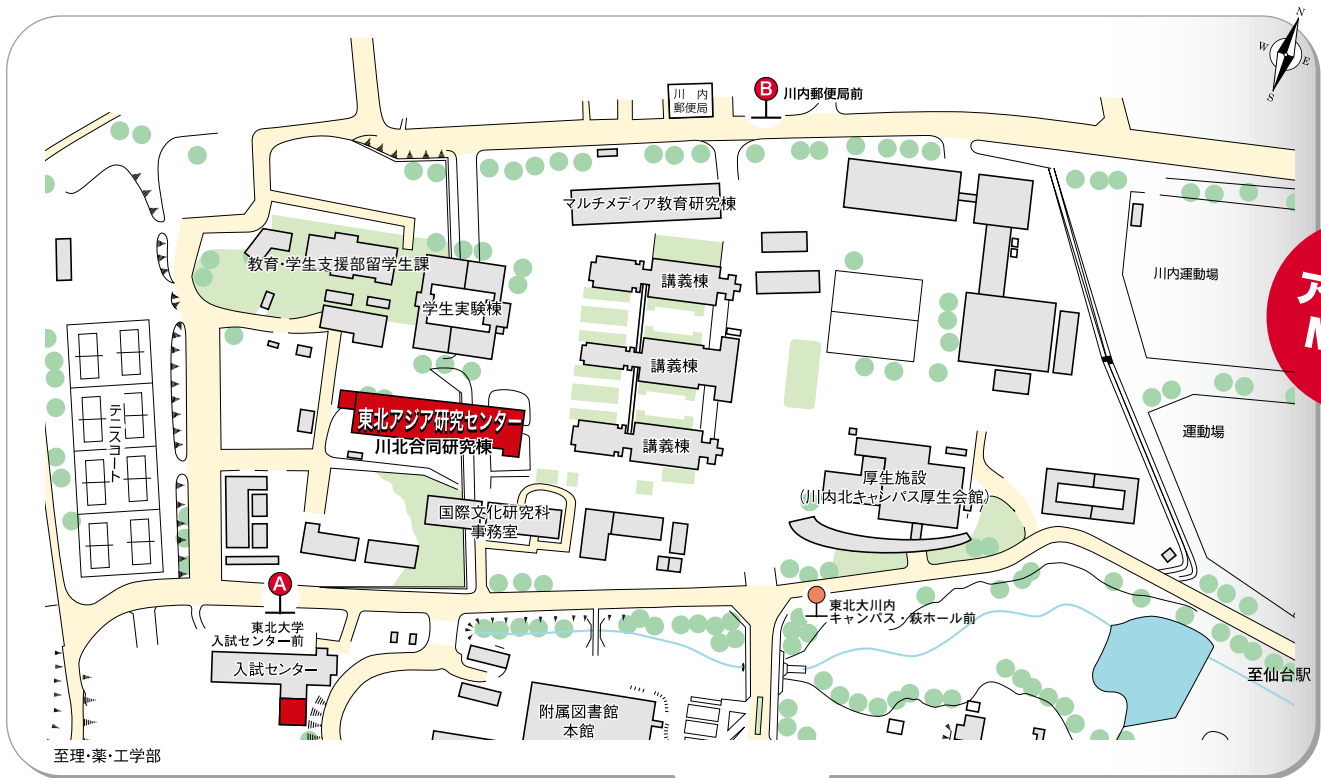
※東北アジア研の教員が「指導教員」となっている大学院生、学部学生の人数を記入

(単位:人)

(単位:人)

学生別	部局別	2005年度	2006年度	2007年度	2008年度	2009年度	2010年度	2011年度	2012年度	合計
1. 博士後期	文学研究科	4	4	3	2	1	1	2	3	20
	理学研究科	4	3	3	0	0	1	1	4	16
	工学研究科	1	1	3	3	2	1	2	1	14
	生命科学研究科	0	0	2	2	1	1	1	1	8
	情報科学研究科	1	0	2	1	1	1	3	3	12
	環境科学研究科	21	19	25	25	21	24	20	14	169
	国際文化研究科	4	1	0	0	0	0	0	0	5
	小計	35	28	38	33	26	29	29	26	244

学生別	部局別	2005年度	2006年度	2007年度	2008年度	2009年度	2010年度	2011年度	2012年度	合計
2. 博士前期	文学研究科	0	0	0	0	0	0	0	2	2
	理学研究科	3	1	2	1	2	7	7	5	28
	工学研究科	0	0	3	6	5	5	5	6	30
	生命科学研究科	2	3	3	2	0	1	2	2	15
	情報科学研究科	0	1	0	3	2	3	1	0	10
	環境科学研究科	18	19	18	9	11	12	14	12	113
	国際文化研究科	2	0	0	0	0	0	0	0	2
	小計	25	24	26	21	20	28	29	27	200



**アクセス  
MAP**

## Kawauchi Campus

JR仙台駅前 西口バスプール 乗り場 **9番** より

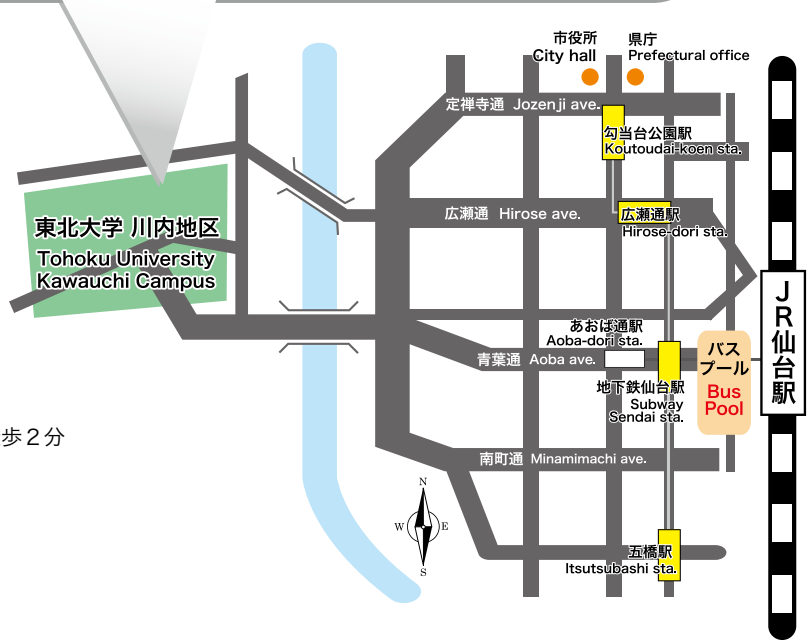
- 710 青葉通 工学部経由 宮教大・青葉台行き
- 713 青葉通 工学部経由 宮教大・成田山行き
- 715 青葉通 工学部経由 宮教大行き
- 719 青葉通 理・工学部・仙台城跡南経由 動物公園循環
- 720 青葉通 博物館・国際センター経由 交通公園・川内営業所行き
- 757 広瀬通 理・工学部・西の平経由 長町南駅・長町営業所行き

のいずれかに乗車 東北大学入試センター前 (A) 下車、徒歩2分  
(ただし720系バスのみ 川内郵便局前 (B) 下車)

JR仙台駅前 西口バスプール 乗り場 **16番** より

- 730 広瀬通・二高県美術館経由 交通公園・川内営業所行き

に乗車 川内郵便局前 (B) 下車、徒歩3分



2013年9月30日発行

編集 東北アジア研究センター広報情報委員会  
 コラボレーション・オフィス  
 編集協力 (有) まちのほこり研究室  
 デザイン (有) グリッド  
 ベース  
 写真協力 齋藤秀一写真事務所  
 印刷 小宮山印刷工業株式会社

発行

東北大学東北アジア研究センター  
 〒980-8576 宮城県仙台市青葉区川内41番地  
 Tel : 022-795-6009 Fax : 022-795-6010  
 URL : <http://www.cneas.tohoku.ac.jp/>